北支

昭和十四年七月四日第三種郵便物認可 昭和十六年五月十五日印刷納本
昭和十六年六月一日發行（毎月一回一日發行）第二十五號



現地編輯

THE NORTH CHINA

6³

北支の農業

耕地

Agriculture in North China Farms

春の名殘りの柳絮がとんで、アカシヤの花が咲き初めると、北支には夏が來る。鍬取る農民の背に、水を汲み上げる騾馬の滿身に、初夏の太陽は燦々とふりそそぎ、陽炎燃えて、畠の水白くきらめく中に、玉蜀黍の若葉はぐんぐんのびて、力づよい初夏の息吹きをつたへる

紺青の空の下、孜々として働く農夫達には、いつしか血なまぐさき戰火の思ひ出は消えて、ただ腦裏を過ぎるものは――麥と棉と水――否、土のみである。幾千年の間、彼等父祖の血を培ひ養つて來たこの耕土には、彼等の深き愛著と、根強き生命が潛む。支那の農業は今から四千年程前、神農氏によつて黄河の流域に初めて芽生えたと云は

幾千年もの間、彼等の祖父の血を培ひ養つて來たこの耕土には彼等の深き愛著と根強き生命が潛む



本となし、强い意志と、逞しい勞働力とを以て無慈悲な自然と鬪ひながら黃河を樞軸として河南、山西、山東とその耕地を擴大して行つた

「今は山中、今は濱……」子供達が唱ふ鐵道唱歌のそれの樣に、平原の少ない土地に育つた大和民族には、この涯しない支那の平原を想像することさへ不可能であらう。而もそれが丹念に耕された耕地なのだ

北支の土壤は黃土及びその沖積土よりなつてゐる。山西省の殆ど全部、陝西甘肅、河南の大部分、寧夏、蒙疆の一部、河北省の西部及び北部、山東省の山岳緣邊の一部に亙る十一萬九千九十方哩が卽ち黃土によつて蔽はれてゐる。又黃河及びその支流諸川の流域たる所謂中原平野の大部分は、卽ち黃土沖積層でその全地域は廣袤十萬方哩に及ぶと云はれる

黃土は主として中央亞細亞などの地表土壤が風に依つて持ち運ばれ、それが極めて複雜な地質學的過程によつて出來たもので、北支那を通じ平均三十呎の厚さを有してゐる

この黃土は多孔質で水の滲透が容易だから、降水をその中に保有し、地表の乾燥に應じてはその多孔質による毛管現象が土中の水分と鑛物質の養分とを吸ひ上げる。かうして降雨の惠みさへあれば、黃土の肥沃性は高く發揮される。だから支那文明の發達がこの黃土地帶に始まつたことはこの土壤の持つ農業生產物の豐富さを忘却しては考へられないのである

蒙疆地方にみる耕土



灌漑

石炭と鐵とがなければ工業社會が成りたたないと同様に、人工灌漑なしには支那の農業經營は考へられない
北支の農民は年々旱魃の被害を受け、所謂十年九旱の苦惱を嘗めつつある。もとより農民は自ら乾燥農業を會得して巧妙な栽培管理を行つてはゐるが、到底天の災害には拮抗すべくもないのである。ただこの旱害排除の途は一に



京山線軍糧城愛護村に於ける華北交通施設の模範灌漑

この詩は周朝の幽王（西紀七八一——七七一）の后妃の作で、キリスト誕生前八世紀の時代に支那では已に灌漑が行はれてゐたことを窺ふことができる
魏の襄王につかへた尸校は灌漑のため漳水を利用して鄴（黄河の北部河南省）の地を豐饒にした。そこで民衆は彼の讚歌を作つて唱つた

鄴は良い大守を得た

三百餘支里の運河を開いて四百萬支畝乃至それ以上の人民の田の灌漑に用ゐた。隋も唐も宋も、歴代の王朝は大きな犠牲を拂つて、灌漑事業には力を注いだのである。清の如きは二百七十年の治世の間に三千二百餘囘の灌漑治水工事を行つてゐる
灌漑には河川によるものと、地下水によるものとの二つがある。河川によるるものである。このことは北支が山林に乏しいこと、平時河川の水量が豐富でないこと、一度雨期に入ると洪水に見舞れること等に起因するもので、河川の利用は基本的な治水計畫の實施が先決であり、これには多額の資金と長期の日子を必要とする。從つて北支の灌漑普及には取敢へず鑿井が問題となつてくるわけである。現在北支の現地





井戸水による灌漑

Agriculture in North China
Watering Facilities

灌漑耕作の普及に俟つより外はない。
灌漑によつて旱害が排除され、尚一年二毛作の耕作をも行ひ得るのである
支那における灌漑實施の最初の記録は詩經の中に見出すことが出來る
漂茫たる地から流れ出づる水は
北に流れて米田を潤せり——

その名は尸
彼は鄴を灌漑するために漳水を開いた
嘗て斥鹵の地とされた所が今は米や稷を培らへる
秦の始皇帝は涇水を鑿つて關中を沃野となし、周の武帝は長安と黄河を結ぶ

灌漑は古くより山西、綏遠のやうな黄河系上流に發達した。河北省や山東省の一部に於いては小規模のものを見受けるが、その大部分は地下水の利用である。現在北支の灌漑耕地面積は全耕地面積の四・七九%で、支那灌漑の古い歴史に比してその普及は甚だ微々た

機關ではそれぞれその對策が行はれてゐるがその一つの現れとして華北交通の愛路村では一年五百眼の鑿井工作を目標に、灌漑耕作の奨勵普及を積極的に行ひつつある

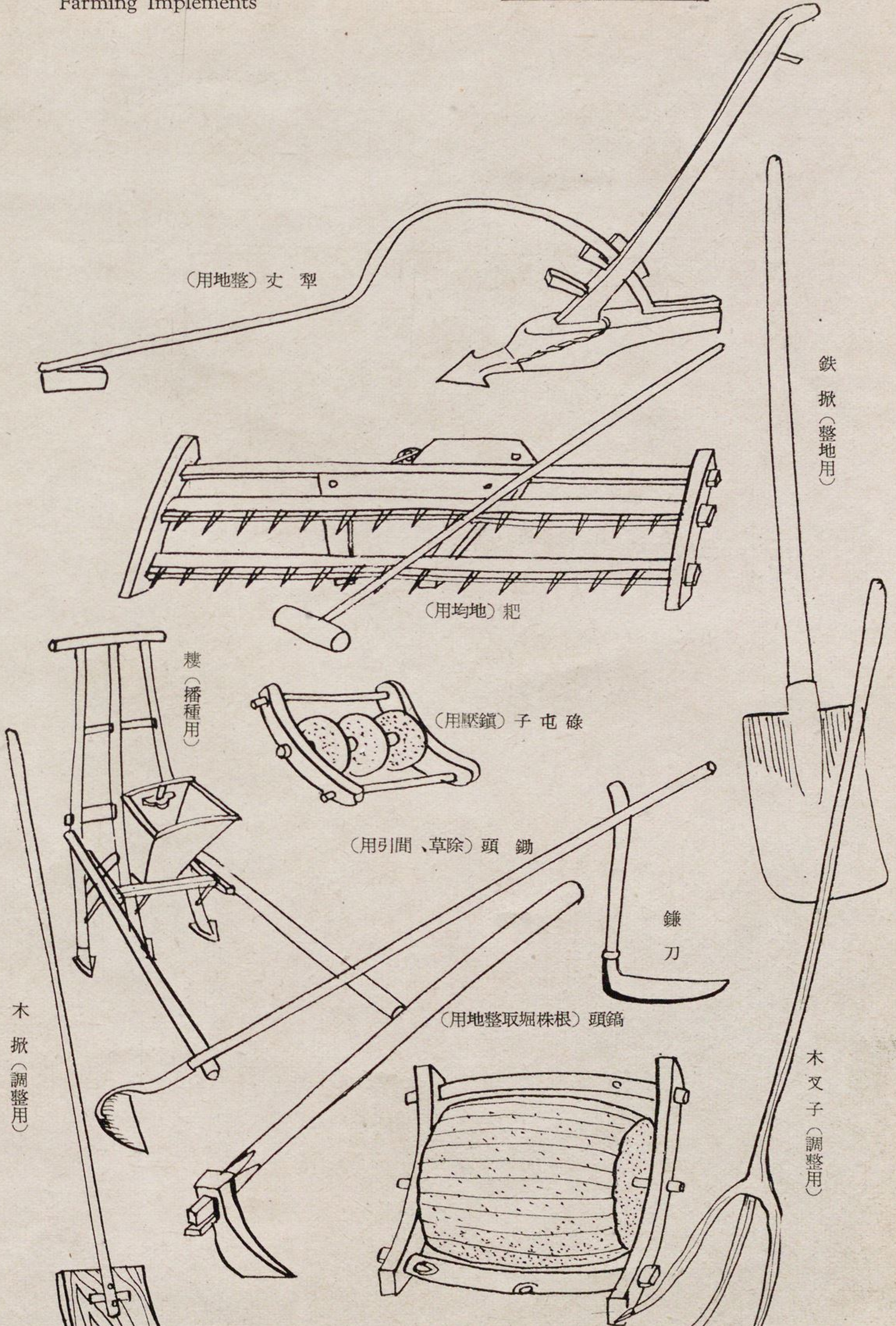
京山線沿線にて

驢馬を使つて井戸水を汲みあげる

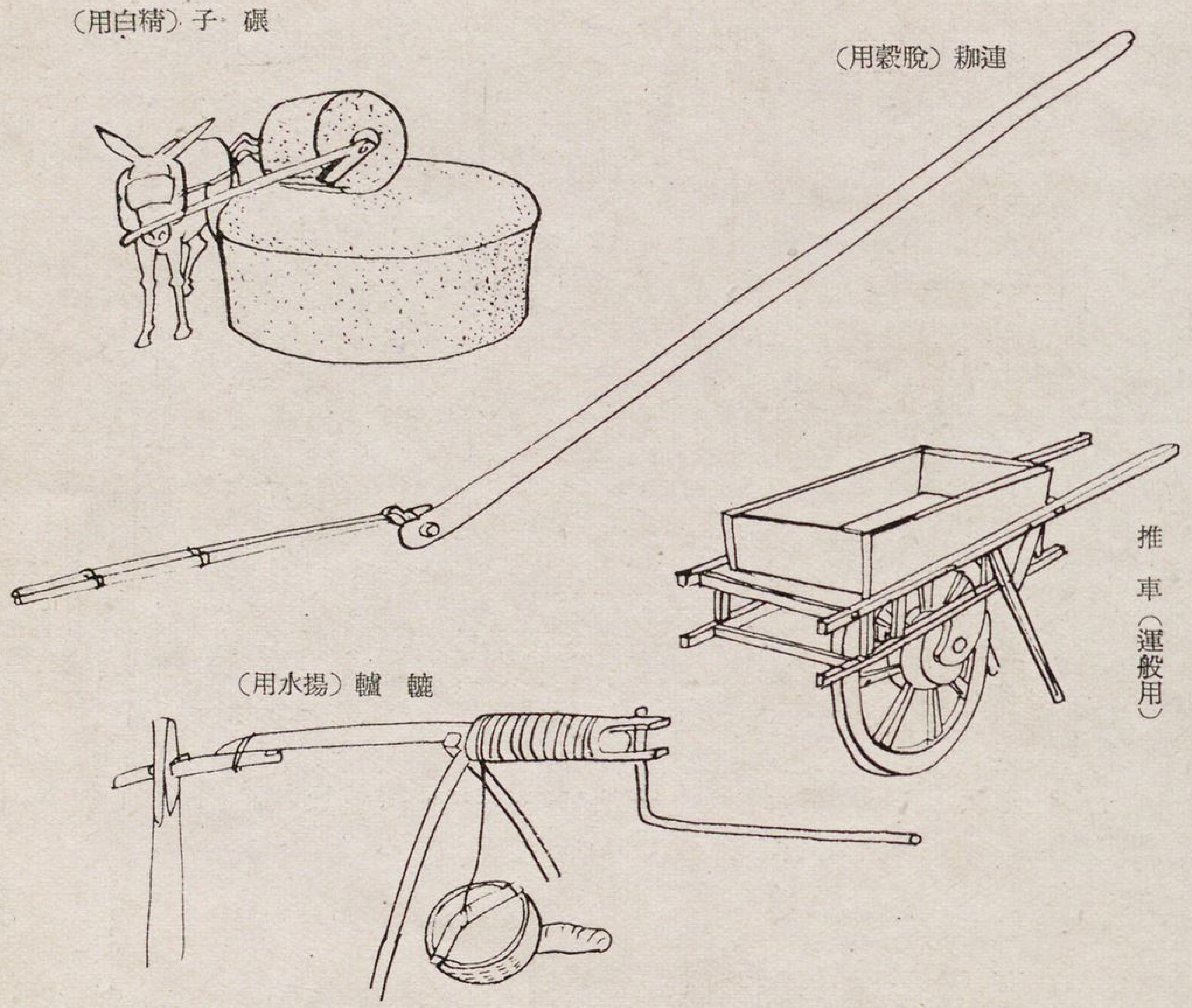


Agriculture in North China
Farming Implements

北支の農業



農具



娘々廟會の市から三股抓や掃子を買つて歸る



北支の農具は極めて原始的である。その構造は簡易で粗笨であつて、その多くは木製であり、要部に鐵を用ゐてゐるに過ぎない。これは北支の農業が小規模なため比較的に高等の農具を必要としないからで、近代的な大農具の利用は現状では不合理であり第一財力が許さない。更に北支の土壤が——黄土のため——極めて處理し易いといふことに重大な理由がある。例へばその特質のため北支の耕土は比較的淺耕であるが、そのため鋤は少さく効力の少ないもので事足り、土に深く喰ひ込まない先だけ鐵のついた木作りのものが使用される。また現在山東地方に多く使用されてゐる孤輪車と稱する農用車は今から二千六百年程前、齊の管中が發明したものといはれる。それが今に至るまで用ゐられてゐるのである

農具の形狀は地方によつて異なるが、使用する農具の種類は略一定し、現在河北省內で使用されてゐる種類は大體四十四種に及んでゐる



孜々として働く農婦



仕事を終へて

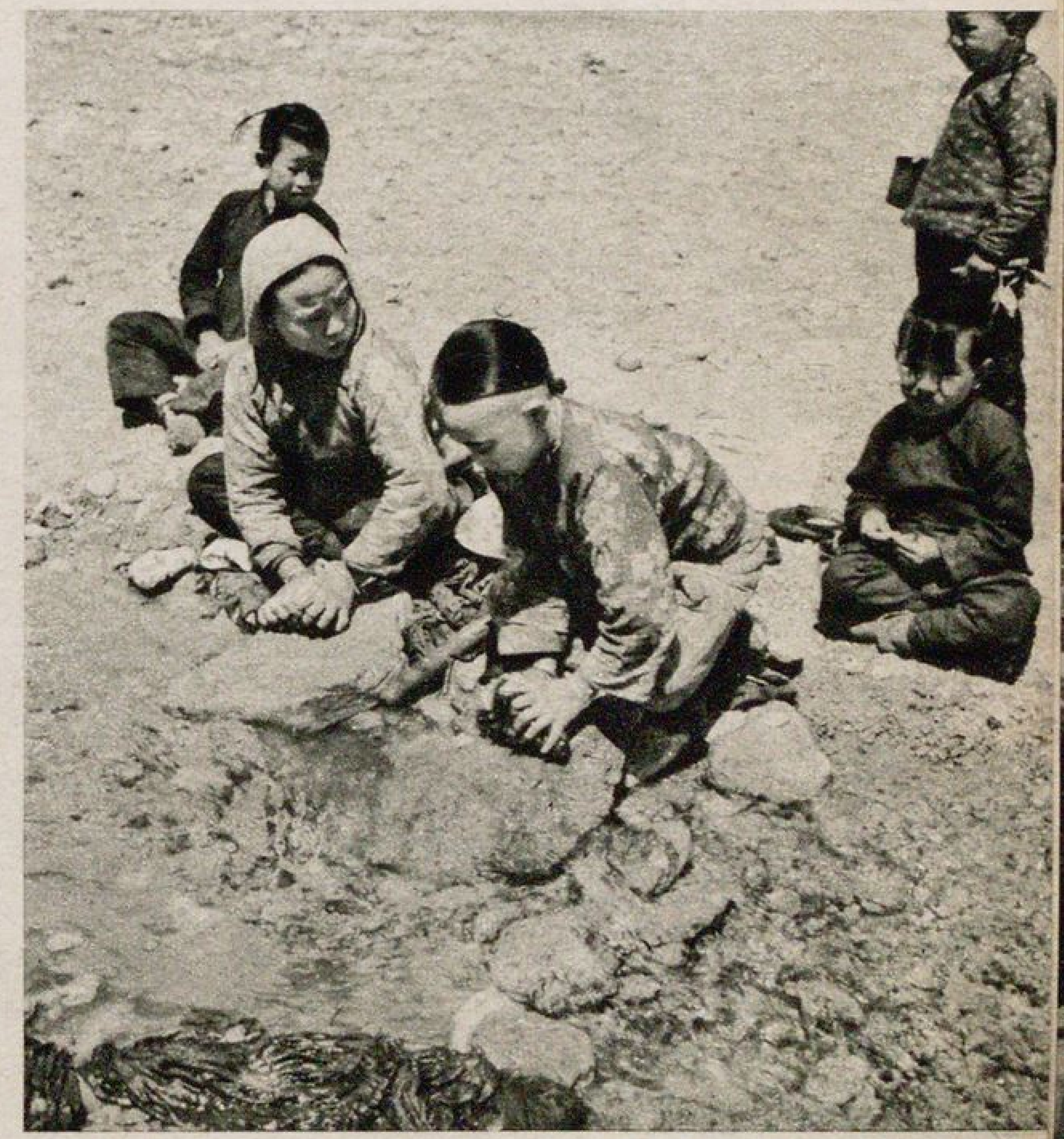
農村生活

北支の農業

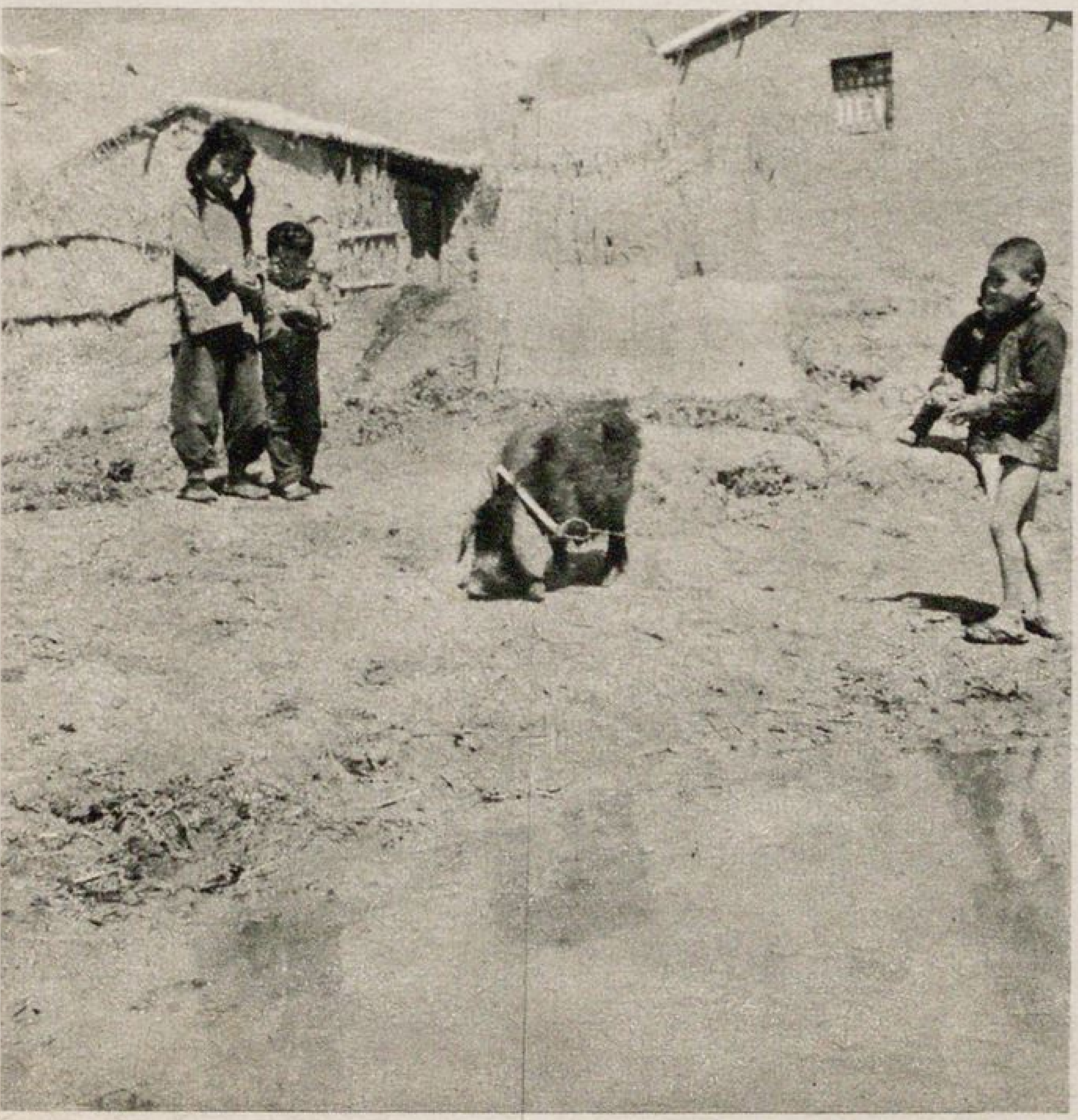
Agriculture in North China
Life of the Farmers

支那の人口は現在五億と稱され、その八〇%が農民である。これらの農民は明けても暮れても、土の生活に終始する。四千年の永い支那農業史を繙けば河川の氾濫、又は草根を掘り、石を嚙つて餓を凌いだ旱魃、恐しい蝗の害、無道な帝王、軍閥の搾取等々の苦鬪連續のみである。農民は之等に對してただ默々ともぐらの様に土にまみれて從順な屈服を續けたのである

大鳳陽　小鳳陽——
鳳陽はもと良い城下
あの朱洪武の出てからは
十年の旱、九年の不作



大人は野良へ、子供は洗濯



豚と遊ぶ



灌漑に手傳ふ子供



お墓に詣る

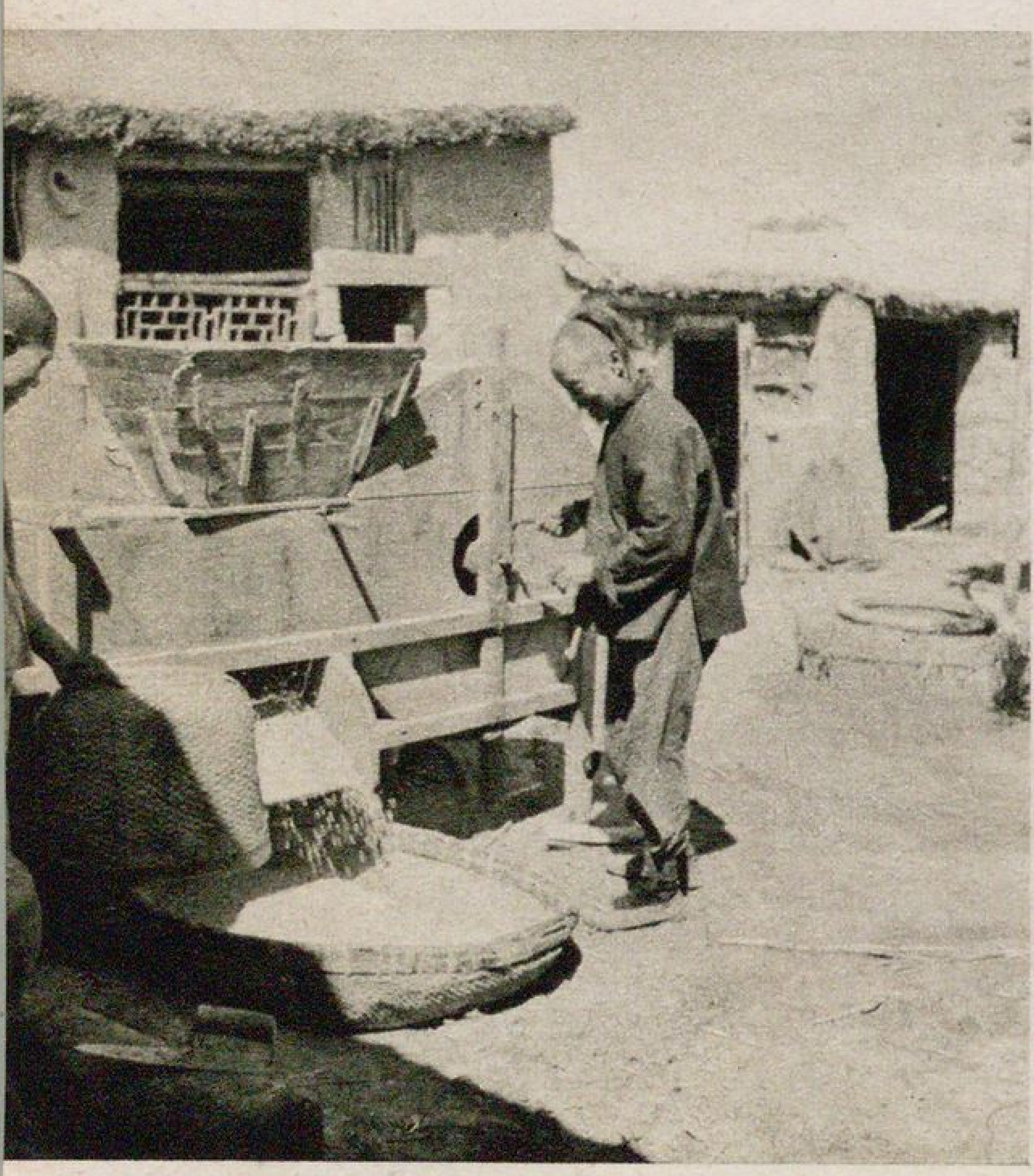
富家は、田を賣り
貧家は、子を賣る
俺には賣るにも子供が無い
太鼓を負つて銅鑼持つて
國から國へ、旅歩き——

賣るべき子も無いので、さすらひの旅藝人として故郷を出立するといふ意である。このやうな歌が支那の農民には何時の時代にも附き物であつた

今次の事變にあつても、國民黨、共產軍の焦土戰術、食物の强制徵發、兵士の强制募集等々、剩へ昭和十三年、十四年の二ケ年に亙つて北支全域を襲つた旱魃と水害は北支農村を窮乏のどん底に落し込んだ。昭和十四年度の穀物穀粉の輸入額は北支總輸入額の一一%に達した程である。日本が必要とする北支の資源——一千七百億トンの石炭三億トンの鐵、十億トンのアルミニウム原料としての礬土頁岩、年產百萬トンの鹽、三億五千萬斤の棉花、これ等の開發も農村の復興なくしては不可能であらう。北支が當面せる緊急の問題は食料さへ自給し得ない農村を更生せしむることである。これには非占領地區の徹底的肅淸による農村の確保、農業對策機關の强化擴充が急務であり、關係當局によつて諸對策が講ぜられつつあるが、ここに最も注目すべき農村復興對策運動が展開されつつある。すなはち華北交通によつて成長しつつある愛路村工作がそれである



愛護村農作物品評會



麥の撰別



愛路婦女隊の刺繡の稽古



北支の農業

鐵路愛護村

北支の山野を縦横に走る華北交通所管の鐵道五千九百キロ、自動車一萬三千キロ、水運三千二百キロ、この沿線農民の福利増進をはかり、併せて國防の幹線であり、産業文化開發の礎石である交通の確保を目的として實施されつつあるのが愛路村運動である。現在北支の農村中愛路加盟村は八千、その人員は實に三千萬人に達してゐる

華北交通會社は農村の復興運動として



彼等は現實に兇器を持つ敵に對抗するので訓練は軍隊式に嚴格である——愛路少年隊



愛路列車に集ふ農村の人々

Agriculture in North China
Railway Protection Village

農産物の増産、品質改良、商取引の復舊適正を期し、これがために無償で多量の優良種子や樹苗を配付し、施療施藥班を巡回せしめ或は廉賣品と演藝班を滿載した愛路列車を運轉し、或は農業實驗區を設けて農事の改良指導を、問事處を置いて村民の日常一般の相談相手になるなど、村民の福祉厚生のため凡ゆる手を盡してゐる。昭和十四年度の無料配付種子は、小麥、粟、高粱その他種子三十萬圓に上り、又造林計畫は十四年度から實施されてゐるが、初年度五百萬本、第二年度四百五十萬本、第三年度、二百三十九萬本に及んでゐる

治安工作としては防共思想の徹底、匪賊情報網の强化、匪賊と民衆の分離工作、親日觀念の培養などが擧げられ、之等の愛路工作は實施後未だ日が淺いに拘らず、その効果は著しいものがある。又愛路村の少年層の訓育を目的として少年隊が組織されてゐる。十一歳から十七歳までの少年で、カーキ色の制服と隊杖に身を固め颯爽と行進する樣は微笑ましく頼もしい。彼は現實に兇器を持つ敵に對抗するので訓練も軍隊式に嚴格である。匪賊情報の通報連絡、防衛作業、線路の巡察などを行ふかたはら、農業の實習を勵み、日本語を習ひ、明日の中國を擔ふべき優良な國民にと鍛へられてゆくのである

少年隊の外に村の中堅として青年隊と婦女隊がある。婦女隊は因襲に捉はれてゐた中國の若い女性達に、日本語を教へ手藝や料理など女性の嗜みを深めしむるため設けられたものである



北京什刹海

初夏

The Advent of Summer

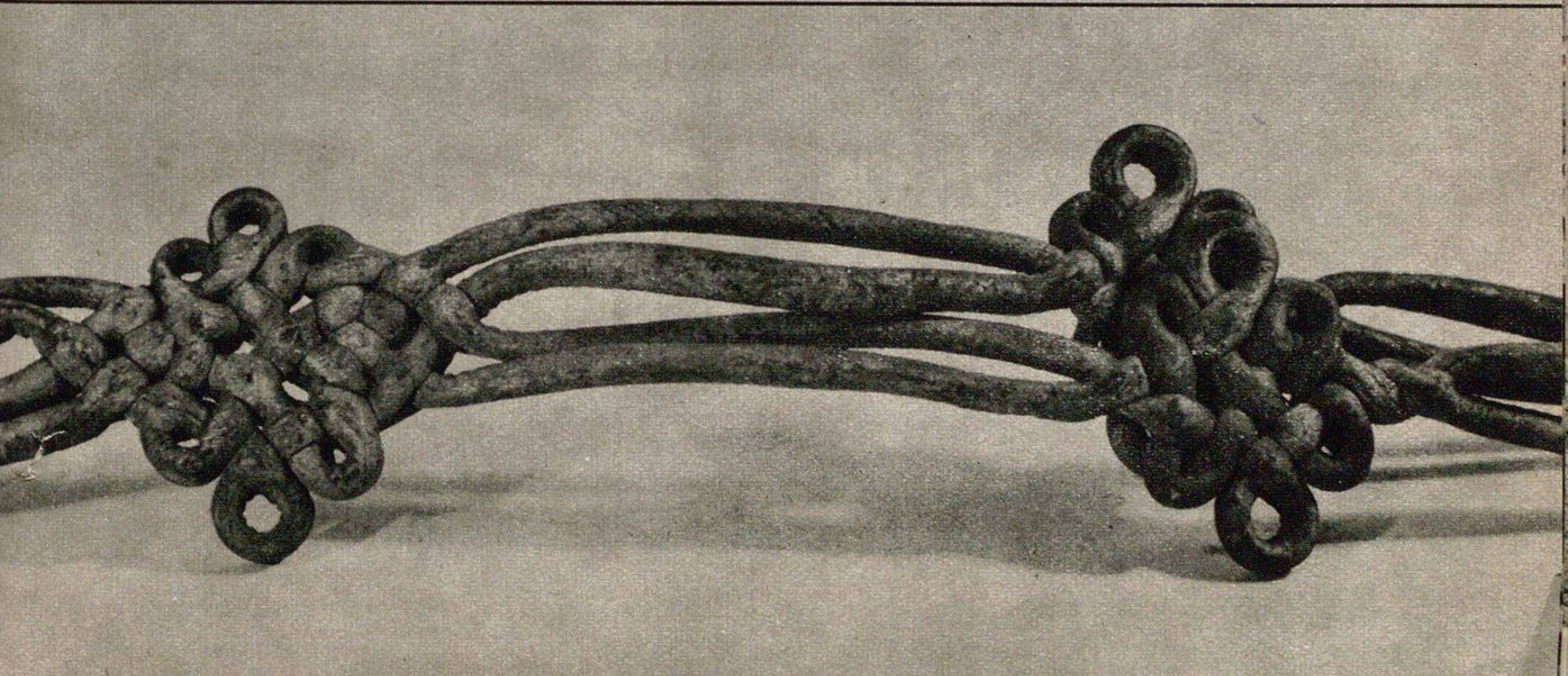
紫禁城の角樓



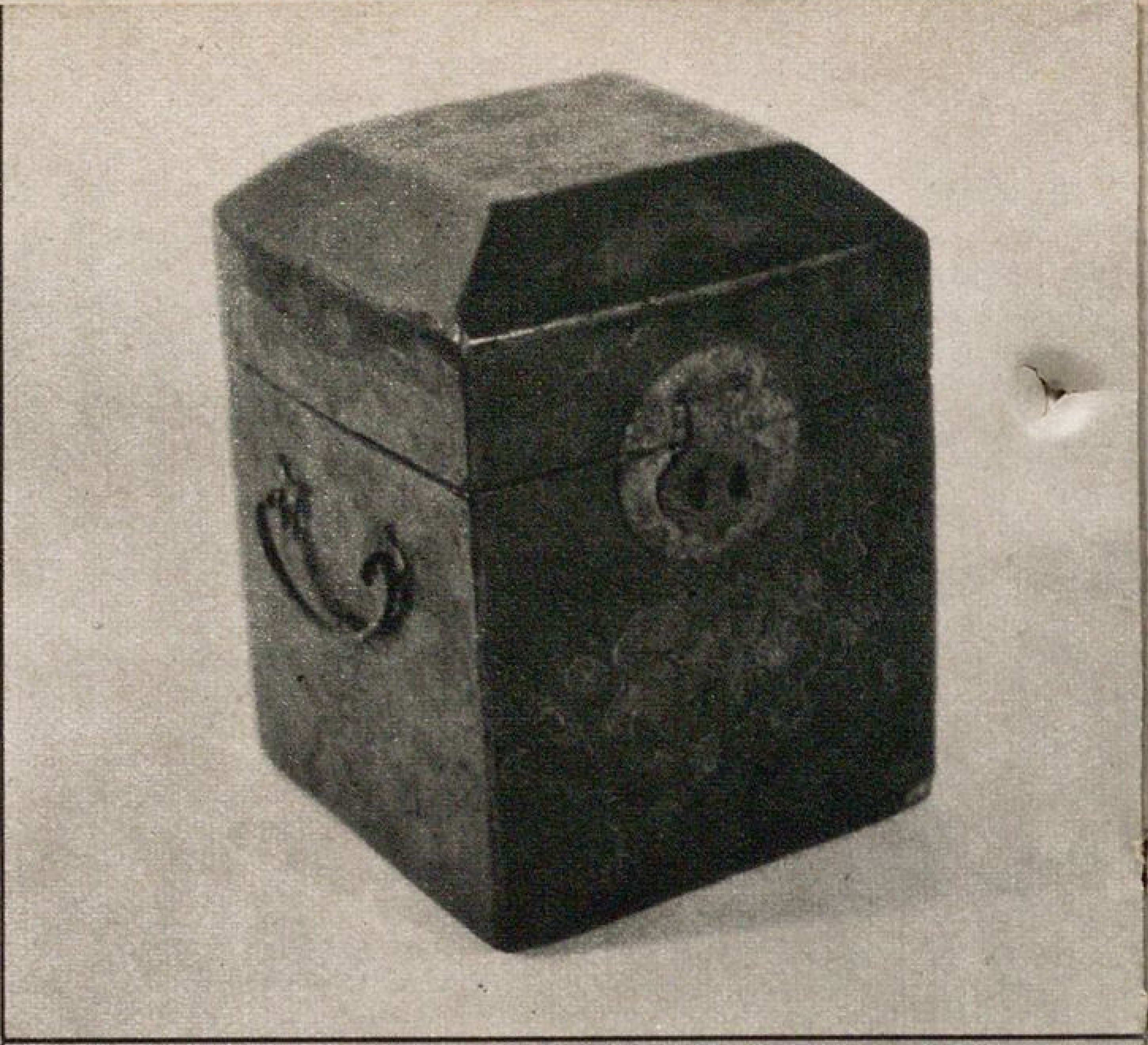


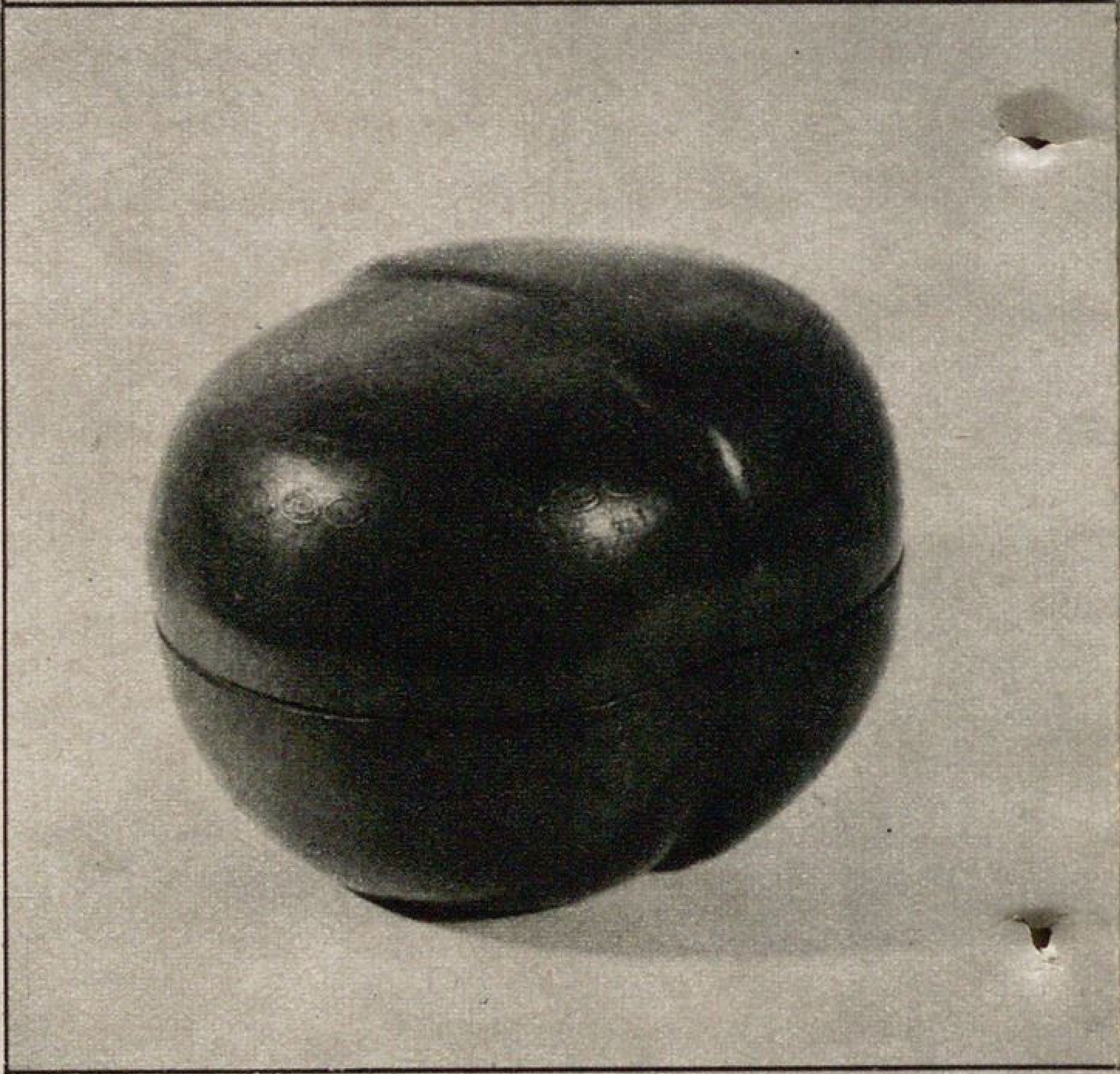






革細工

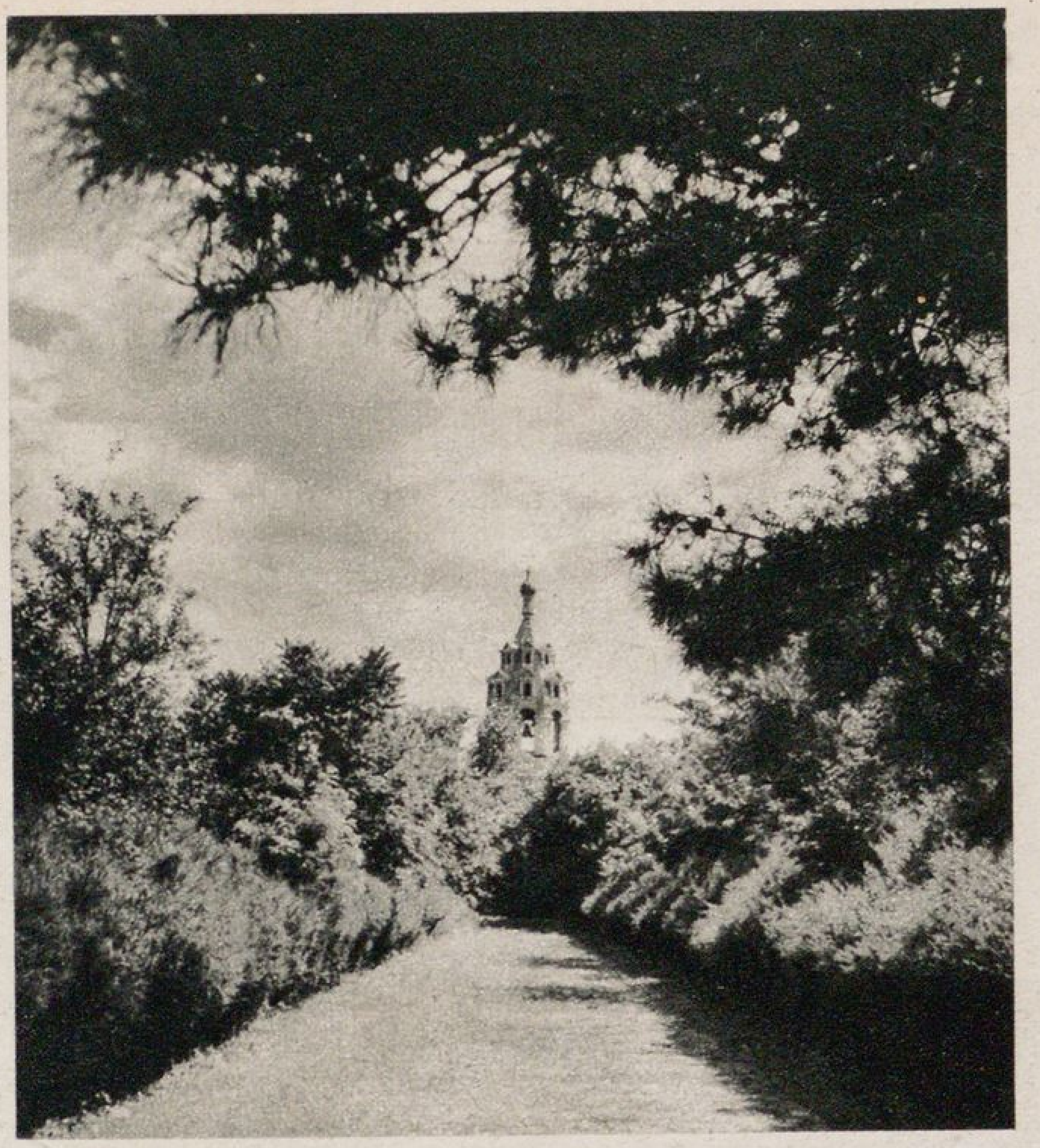




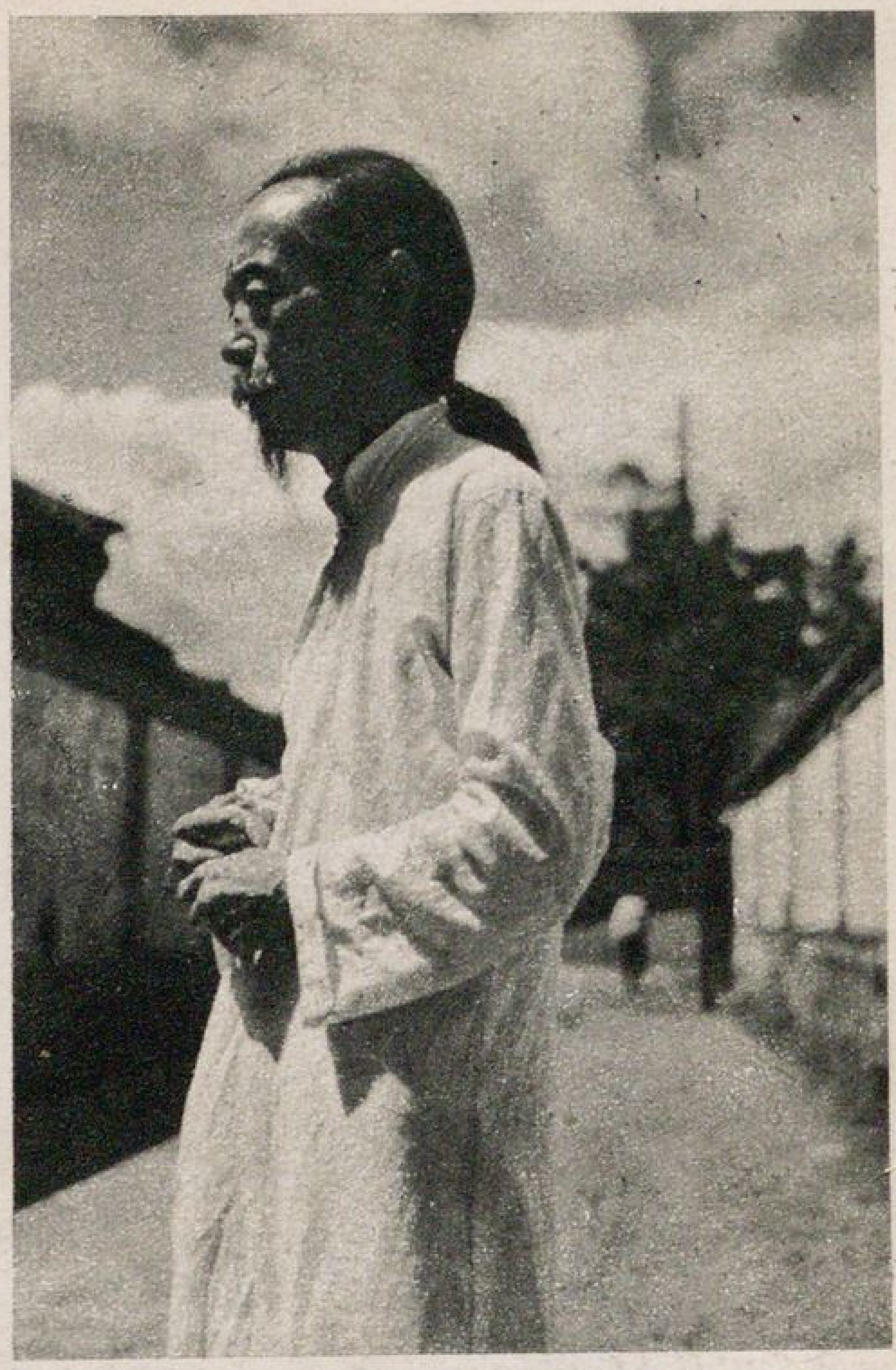


Chinese Leathercraft

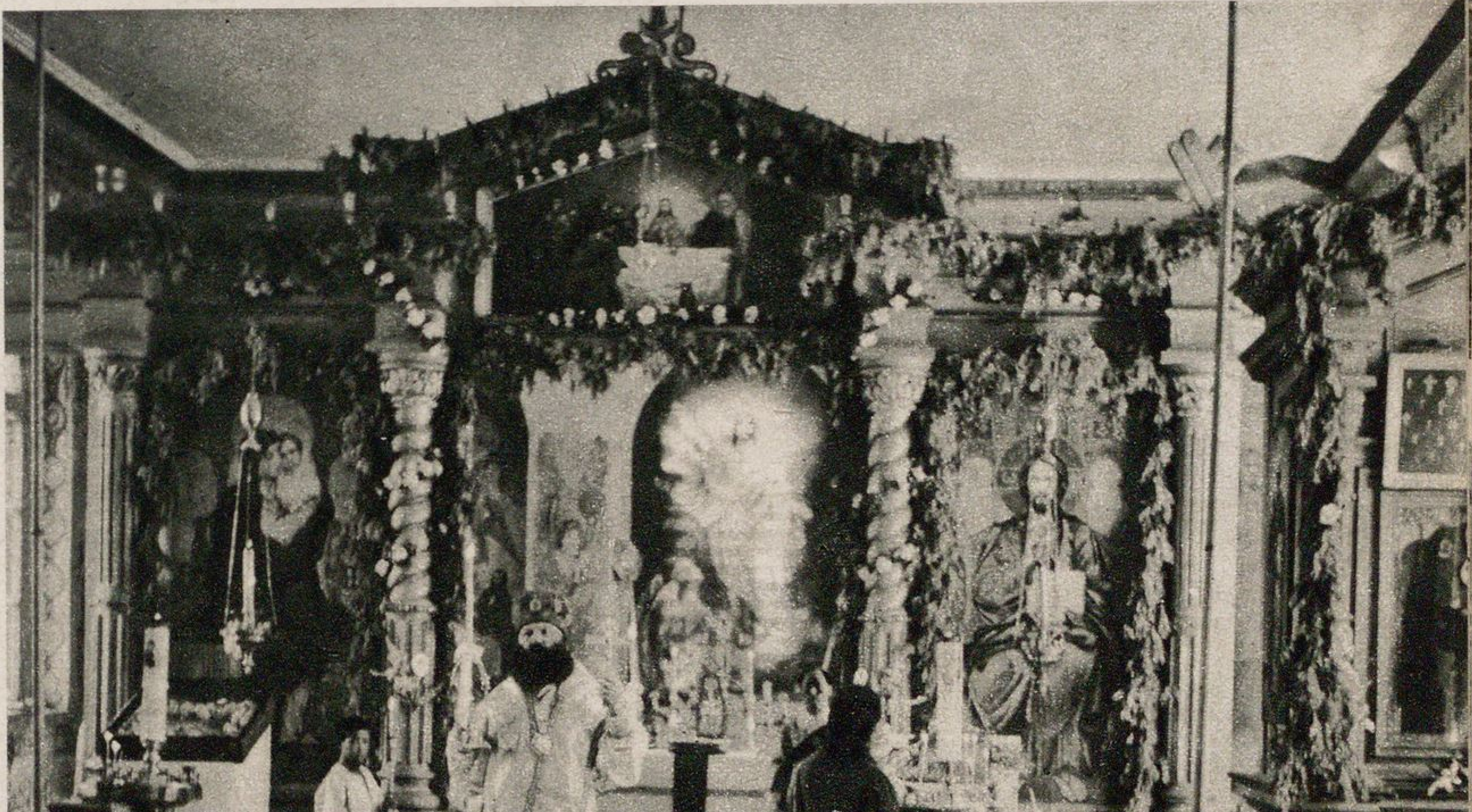
さすがは支那である。皮革類があらゆる方面に工作されてゐる。日本ならば木材が常識と思はれる素材にまで革を用ひてあることに、むしろ意外さを感ずる。ここに圖示した二つの角形函と一つの桃果形盒子とは、すつかり革で作つてある。どう見ても木造と思はれるきちんとした製作で、これに筋彫を施し、金彩を加へた模様もまことに典雅である。枕も同じく革製である。これらは何れも革の表面に漆を塗り、模様には薄く雕装を加へたりしてある。二つの帽子入れは異様な形である。何れも前清時代に、官位の階級によつて定められた形式にしたがひ、帽子入れの形狀もいろいろある。金字形のものは黒漆を塗つて、模様を施さず、もう一つの方は金彩に金泥で蝙蝠と雲形の文様をつけてある。その凸部は帽子に附飾した鳥毛を容れる部分である。革絲の組物は普通の實用的なものであるが、その組み方がおもしろい。尚ほ帽子入れに添へてある革製帽子は、主として蒙古人の用ひるもので、今も晴れの場合などに用ひてゐる



村の屋敷の一部



今では村人は殆んど混血兒になつてゐる



禮拜・中央に立つてゐるのはヴイクトル僧正

アルバジン村

北京城の東北隅に十字架を戴いた異國風な丸屋根が聳えてゐる。それを中心とした廣大な一廓がアルバジン村である

十七世紀の中葉、ロシヤは現黑龍州雅克薩のアルバジン城を一つの基地として極東侵略を謀りつゝあつた。康熙帝は一六六八年軍隊を派遣して此の城寨を圍んで露人を掃蕩したが、その後また頭領チエルニゴウスキーに率ゐられたコサツクは此地に現れ、附近の住民に對して誅求益〻苛酷を加へた。そこで再び康熙帝は一萬の大軍を討伐に差向けた。コサツクは四百五十の小勢で善く防戰したのであるが、終に矢刀共に折れ盡し、一六八五年六月城下の誓をたてた。投降者の大部分約三百人が捕虜といふよりは寧ろ康熙帝の招請に應じ、僧マクシムに率ゐられて北京に來たのである。彼等は滿洲黃旗の一部隊としての親衞ロシヤ人部隊を組織し扶持、住宅の支給を受けた。ささやか乍らも禮拜堂を造つた。これが今日見る寺院のはじまりである

さてジベリヤから此處に移つて來たコサツクは其後殆んど全部が支那人と結婚したため、その子孫はたうとう支那人との區別がつかなくなつてしまひ、ただ教會と關係のある人達がロシヤ語を操るといふことだけがわづかに一般支那人と異つてゐるのみである。それゆゑ此の一廓が世にアルバジン村と呼ばれてゐるのである

The Albazin Quarter in Peking



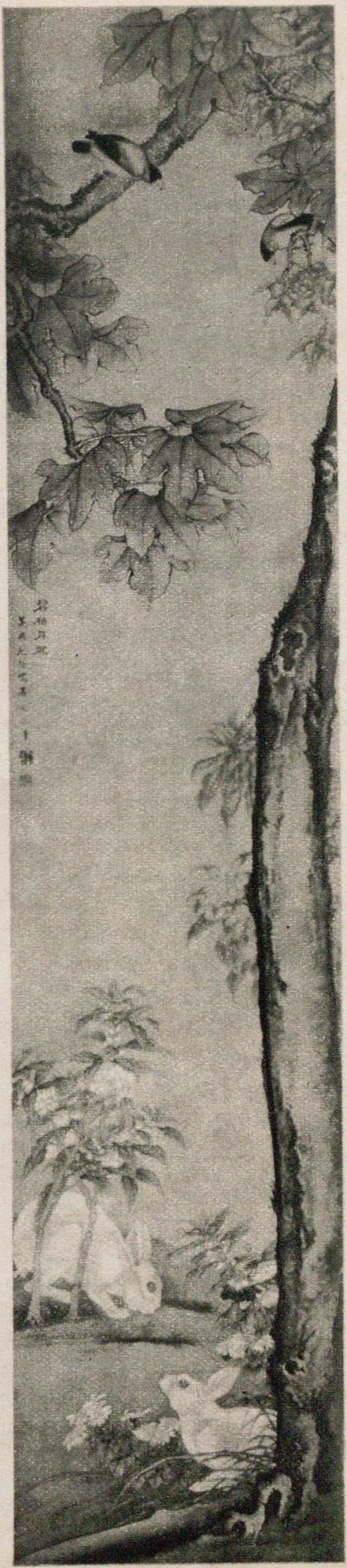
一九〇〇年團匪事變に際し教會は破壞され二百二十二人の村人が虐殺された。現在は修造して之を受難堂と呼んでゐる

沈南蘋筆（清代）

花鳥

（殷同氏藏）





一昨年夏、友人と殷同氏を訪ねた。氏はこの十二幀を展べて、ただ微笑した。蓋し氏の得意の珍襲たる所以である。何れも絹本極彩の密畫。近來、稀に見る精作と感心した。特にその二幀を掲げるが、他の十幀また何れも甲乙し難い。一幀は「碧梧月鳳」と題し「呉興沈銓、呉廷振の筆を寫す」と



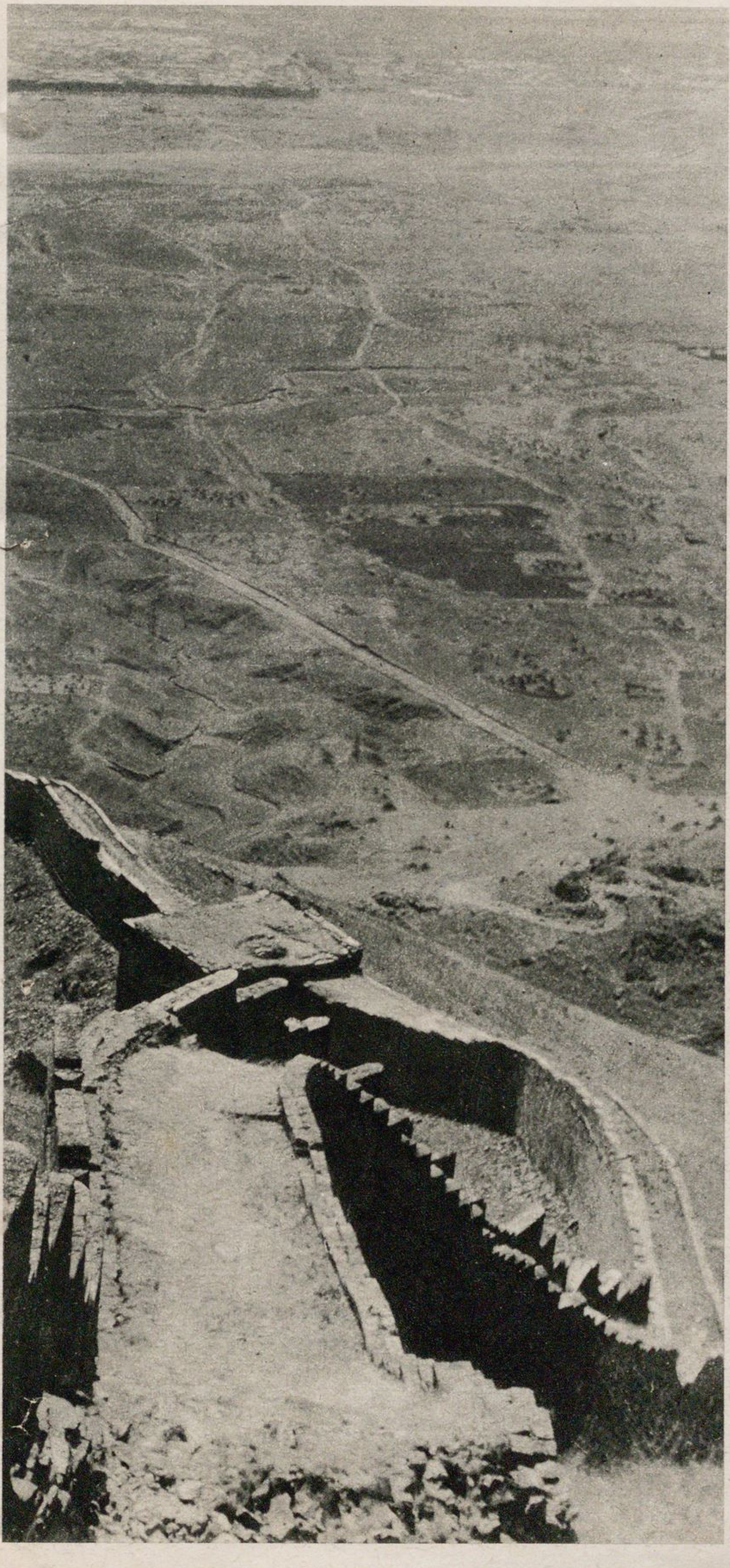
右圖の部分

Masterpieces of Chen Nan-pin, Famous
Painter of the Ching Dynasty

ある。即ち梧桐一幹を主材とし、配するに鳳仙花を以てし、二兎を遊ばせてある。これに野菊あり、双禽添はる。盛夏の靜閑な一景である。畫面餘白を多くし、清爽の氣更に加はる。他の一幀は「萬里封侯」の題書あり「南蘋沈銓、易慶之の筆意を摹す」と署す。この構圖はやや複雑である。全面に嵓崖あり、溪流遠く來つて一洞をなし、嵓を穿つて巖下百丈の瀑布となる。烟霧を立て、潭を搏ち、浪を躍らす。前景に綠樹を配する。そこに三獼猴あり、瀑勢を看て驚倒するかのやう。颯々韃々、まことに夏山幽鬱の境に聽き惚れる。——この外に「海天鶴降」「堂上白頭」「喜報三台」「長春富貴」「秋郊五駿」「百齡食祿」「三陽交泰」「一路榮華」等々の命題の畫がある。何れも樹花に鳥獸を配する。最終の幀に「乾隆辛酉（六年）中秋希翁年台先生の淸鑑のために寫す。浙西、沈銓」と款識する

作者

沈銓は、字衡之、また衡齋、號南蘋、浙江省呉興縣に近き德清の人である。清代花鳥畫の大家で「明の周之冕を宗とし、宋元を參して精麗を加へた」「花卉翎毛を寫して設色妍美」享保十六年（雍正九年）日本に來り長崎に留まること三年、日本近代花鳥畫に大なる影響を與へた。その作畫の日本にあるもの比較的多い。ここに示すはその十數年後のもの。かくの如き十二幀、精密極美の一揃ひは、まことに珍貴傑作である。殊に、馬は趙子昂、龍は陳所翁、虎は林良に倣ふと自署する。一一、研究資料としても貴重である



滿支國境

山海關

Shanhaikuan, on the Borderline between
Manchoukuo and North China

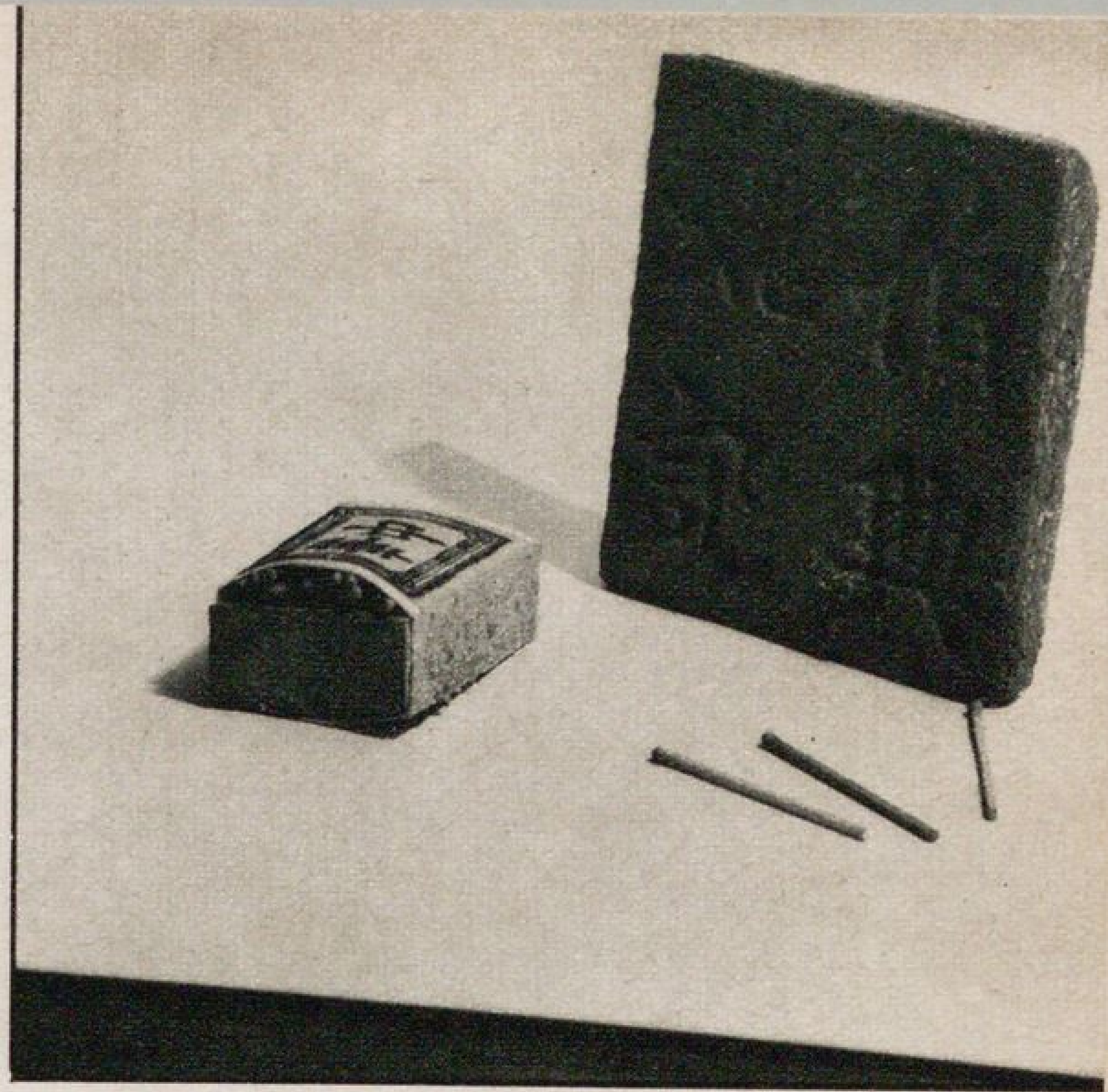


長城を境にして向つて左が滿洲國、向ふに見えるのは山海關の街、またはるか彼方には海も見える

水烟



葉纖を除いて水を適當にふりかける



烟磚

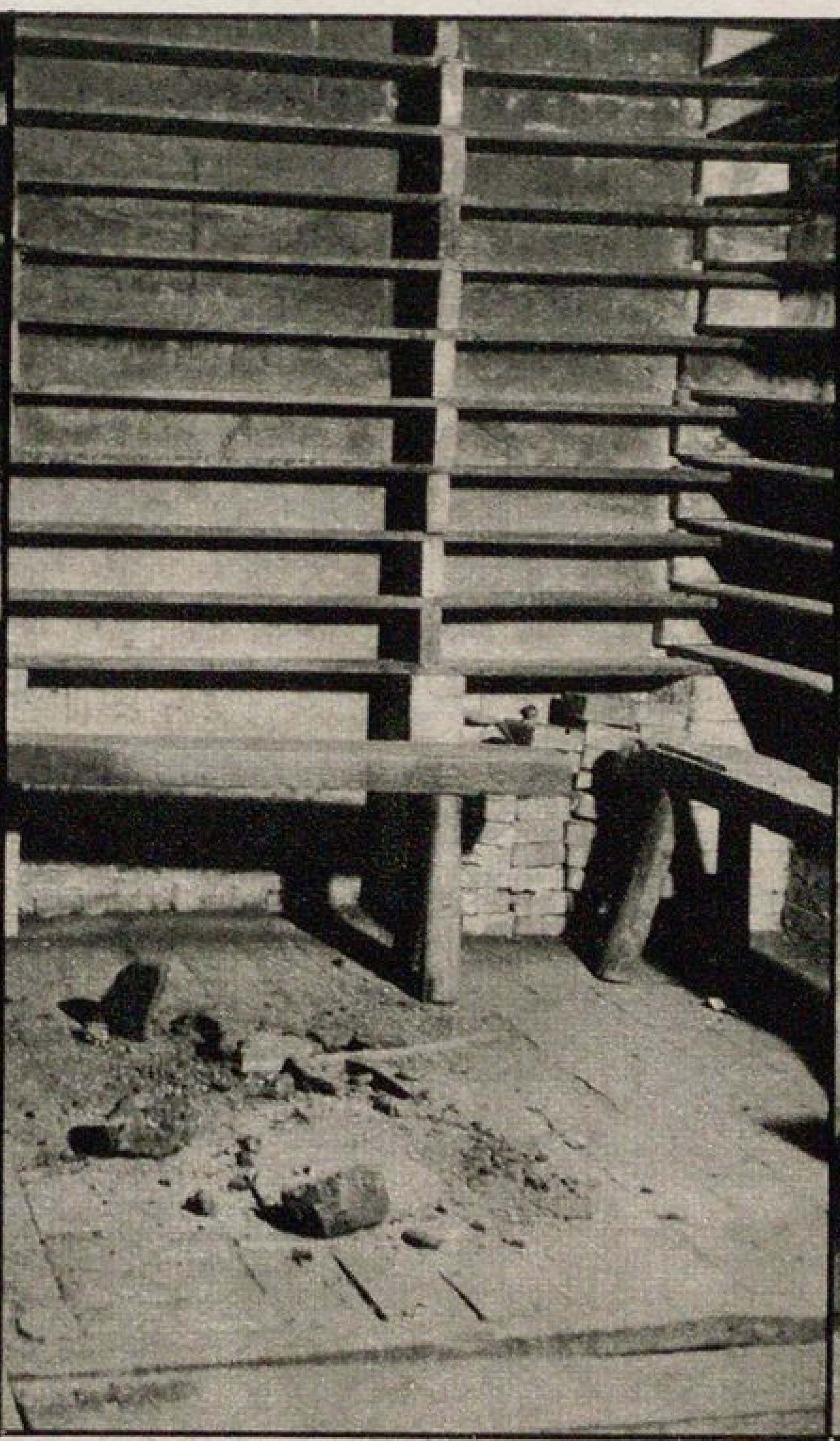
今から四十年程前迄は支那では紙卷煙草の姿は全然見ることが出來なかつた。煙管を用ゐて葉煙草を吸ふか、又は水烟を用ふるかであつた

この水烟は多く揚子江流域の人々に愛されてゐるが、華北や蒙古では商人や上流階級の人々に用ゐられる

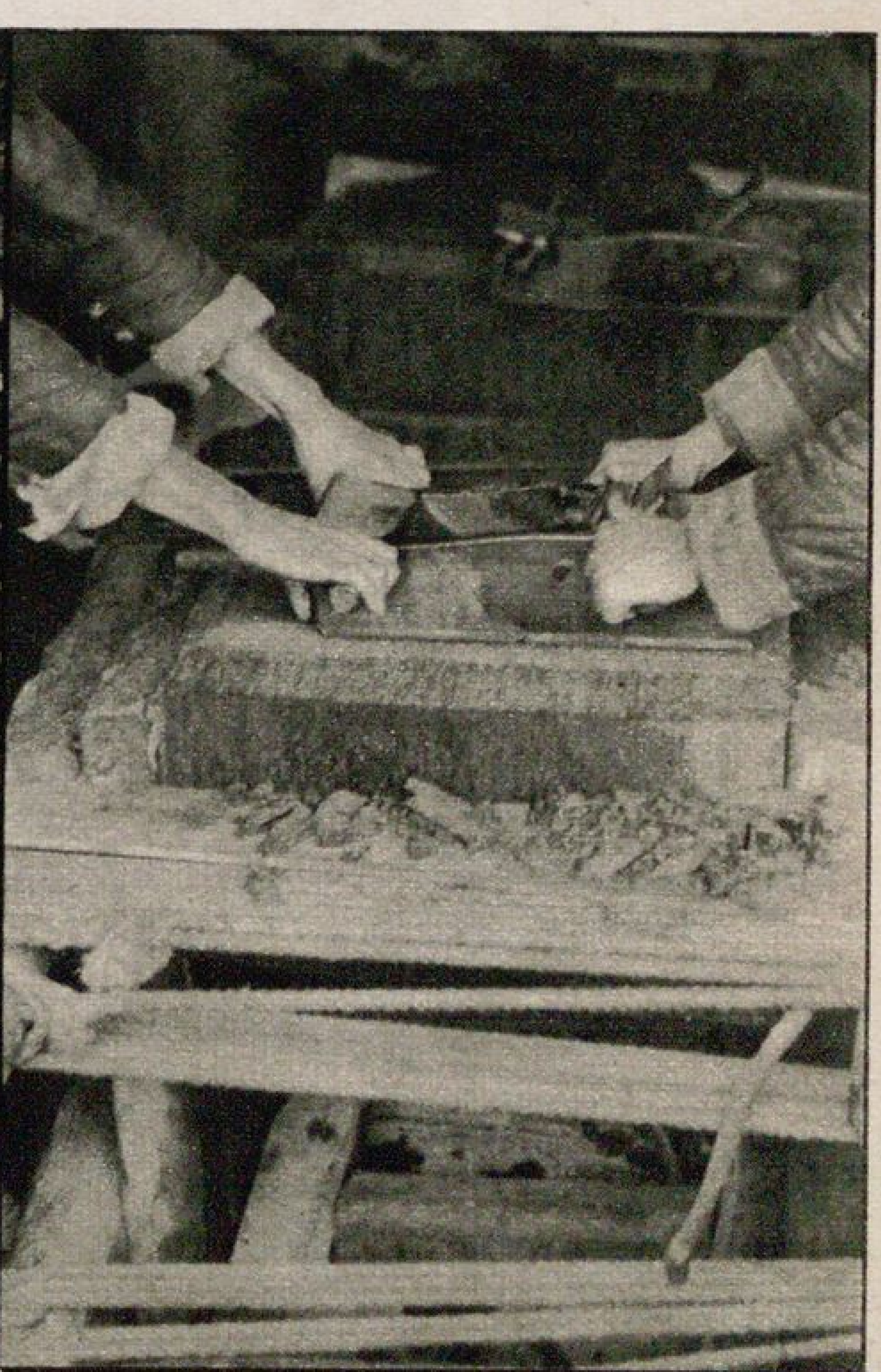
水烟は皮絲と青絲の二種類がある。皮絲は福建、浙江省の兩省に多く産し、青絲は陝西、甘肅、河南に産し、中でも京漢線の道清支線にある清化鎭は最も有名である。青絲は青黄色、皮絲は赤黄色で製法の差異から生ずるのである。清化鎭の水烟の販路は河南省及び蒙古一帶で現在の年産額八萬斤に上ると云はれる



包裝



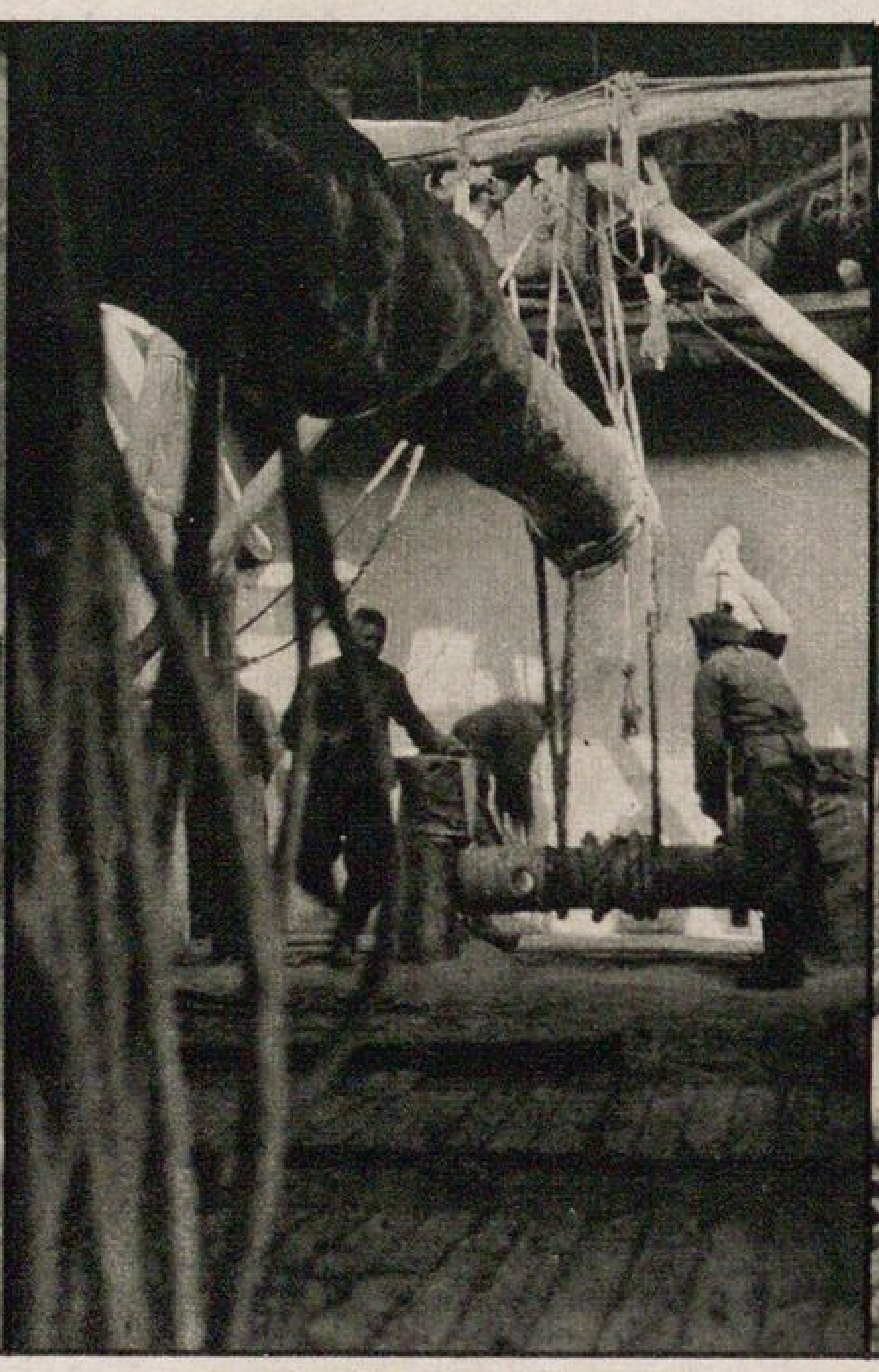
上等品は更に上の如き棚に入れて乾燥する　乾燥室は中央で無煙炭を焚く



一定の大きさに削られた水烟を更に壓縮する、之で並等品が出來たのである



一定の大きさに削る



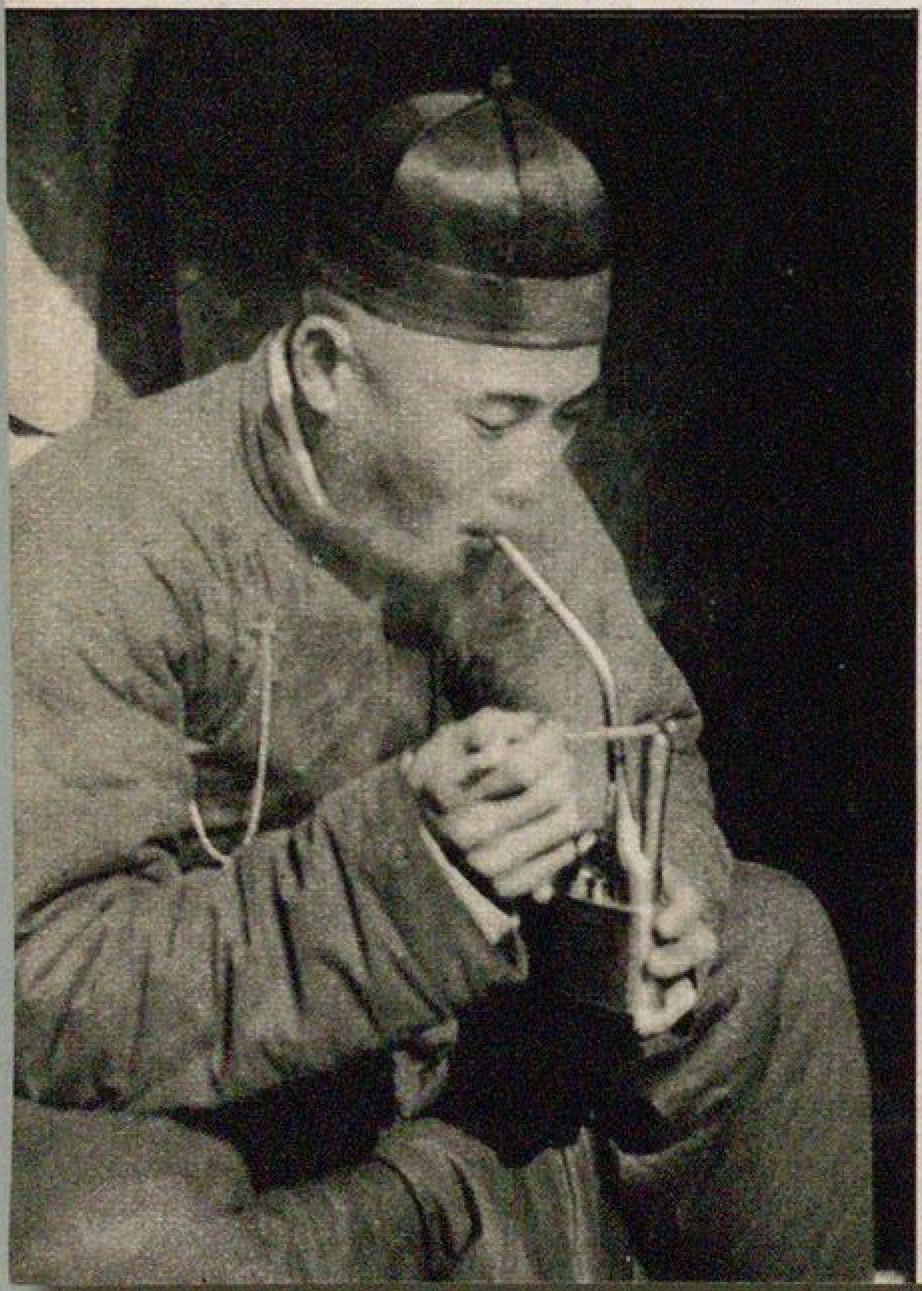
壓縮作業

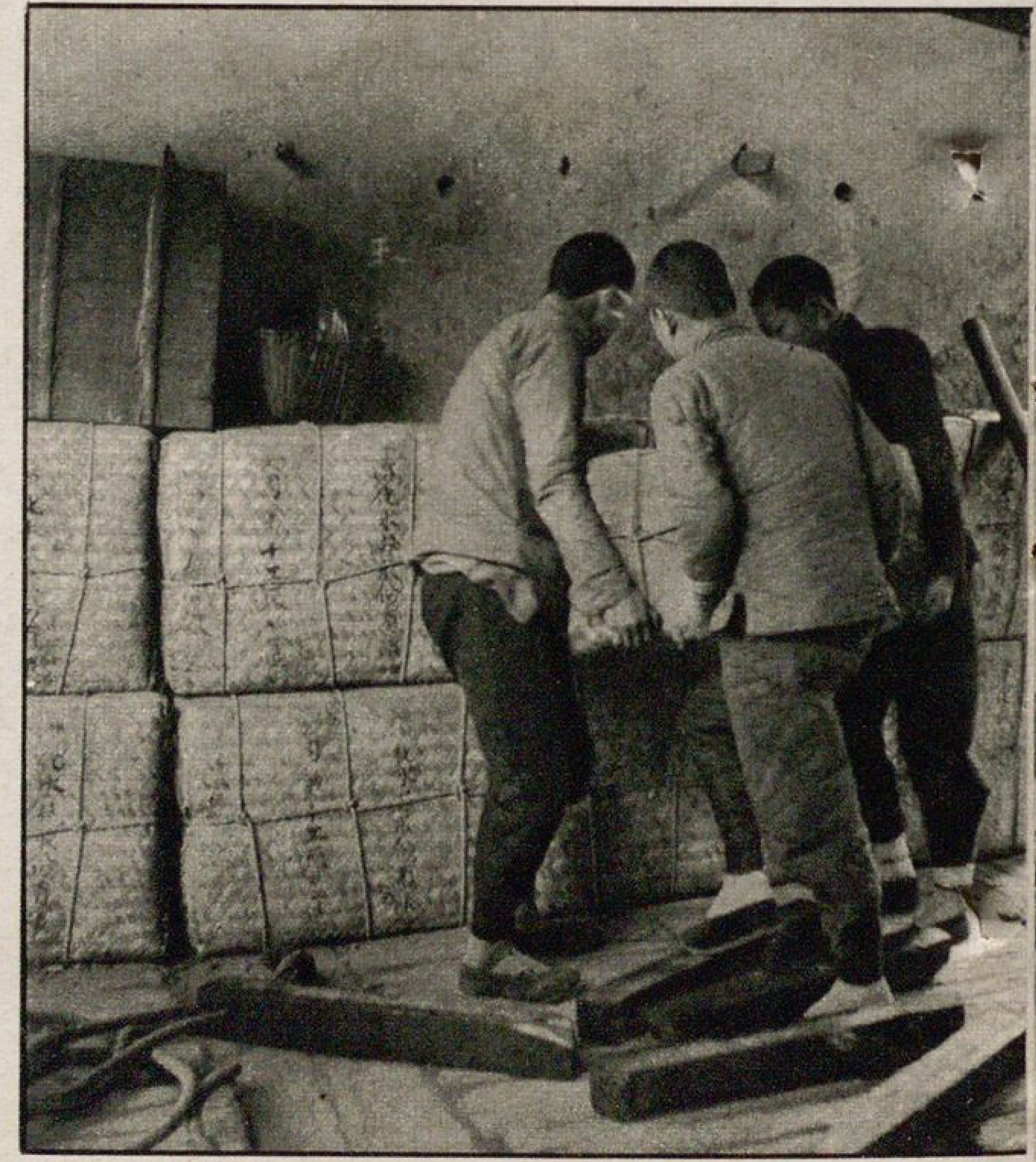


型板で大きく四角に切り大木で壓する

Manufacture of Tobacco for the Chinese Hubble Bubble

水烟用の烟管、その底部には水が入れてあり、烟は水をくぐつてくる





荷造り

金魚

Gold Fish



花龍睛



帽子魚

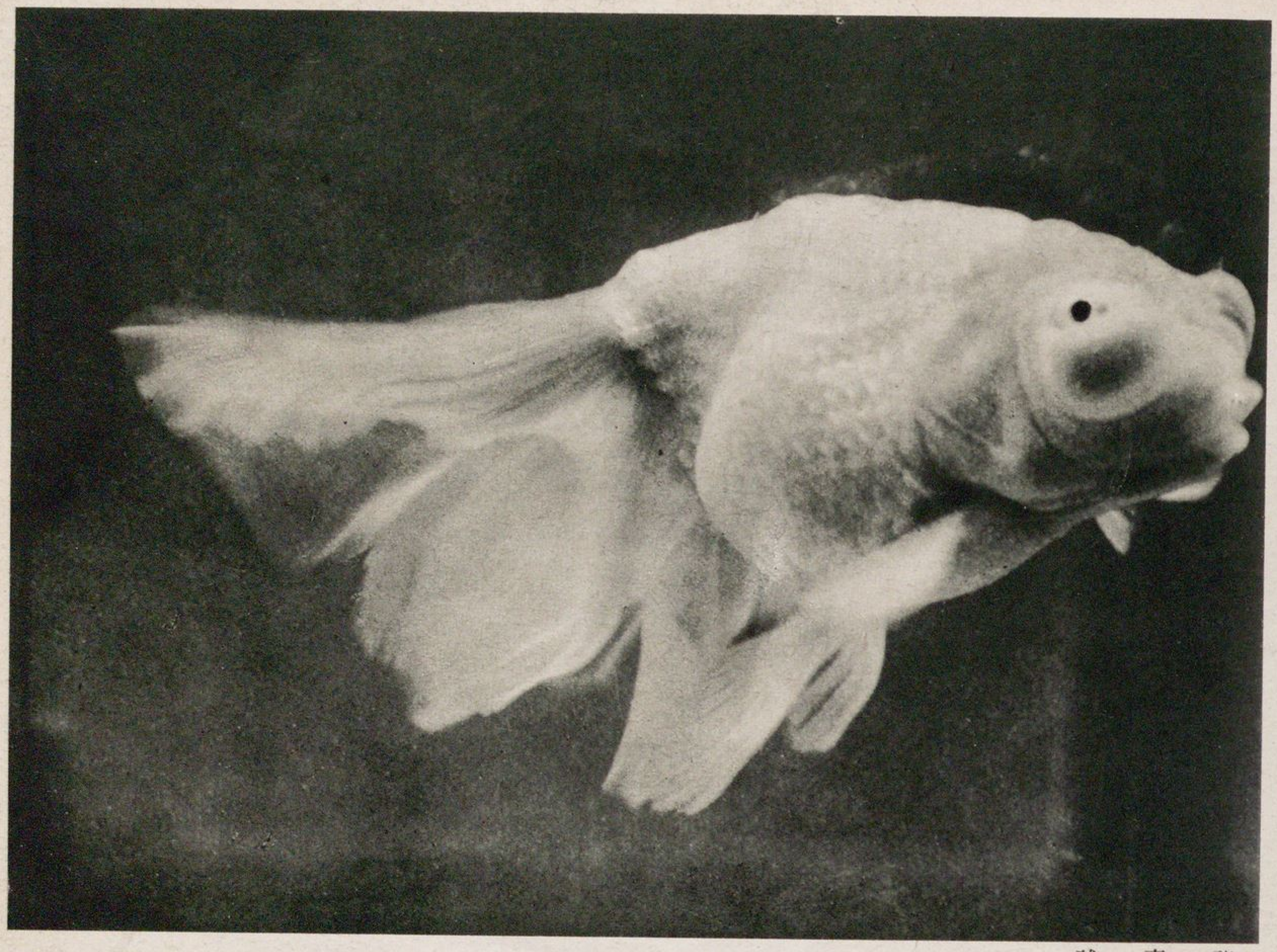
支那人は金魚が好きである。金持のもの好きは金魚飼ひを雇つて、自分で卵を孵したりして道樂にしてゐるものがある。金魚は北京では古くから飼育され、交配技術によつて今日のやうな奇體なものが出來たのであるが、新種はさうたやすく出來ないさうである

五月頃が産卵期で、容器に浮べた金魚藻に、一尾の雌が數百粒の卵を産みつけ、これが好天ならば四日で孵化する。

生れ立ての金魚は芥子粒程しかないが浮游動物（支那語では虫魚といふ）を喰つて、年末には一寸内外に成長する。三年あまりで成魚となり産卵を始める成魚は四、五寸ぐらゐのものであるが成魚になつてからは川や海の魚と違つて、いかに年をとつてもさう大きくはならない。北京の中央公園には十二、三年ぐらゐの老魚がゐる

金魚の飼育は水加減、餌の量などなかなか六ケ敷しいものであるが、殊に越冬が困難である。冬季は屋内に入れて殆んど餌を食はず冬眠の狀態にあるが春先この疲れのために死ぬことが多い。金魚の雌雄の區別は外觀からはあまり相違が無く、固定した種類は、子は親の姿と同じものが出來るのは云ふまでもない

なほこの金魚を賣り歩いて生計を立てる者が北京だけで五十人ゐるといふ



龍青球

白いのは龍青球、向ふむきは五花蛋鳳



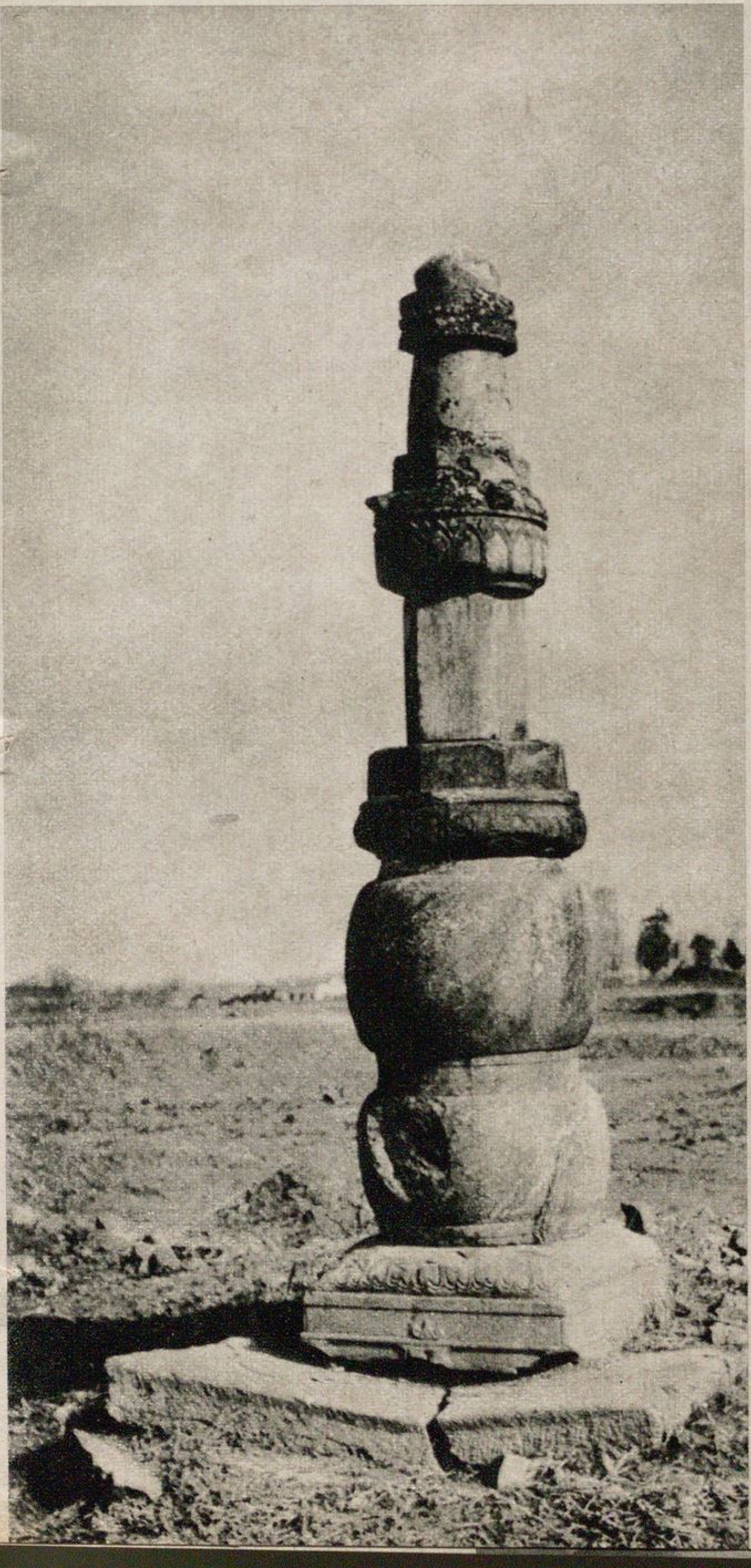
佛塔

北京西郊に捨てられた

A Few of the Forgotten Towers in the Western Suburbs of Peking

蒙古風が黄塵を捲上げて吹いて來る四五月頃、初めてこの地を踏んだ人々は一ぺんに大陸が嫌ひになると云ふ。然しこんな黄塵も慣れてみればそれ程でもないし、又毎日の樣に吹きまくつて居る譯でもない。二三日も辛抱すると今度は和やかな天氣となつて澄渡つた紺碧の空からは太陽がさんさんと照して呉れる

さゞえの樣に城內に閉籠つた北京の人人もそんな頃になると時々踏青と稱し





て郊外散歩に出掛ける。そこでは既に楊柳が芽ばえ麥がのび、のどやかな風景が展開して居る。畑の中には處々農家に混じて、荒廢した朱壁の寺院などがあり、その附近には又奇妙な形の墓塔なども建つて居るのが目につくであらう

かうした場所を尋ねて、寺院の歴史や墓塔の主などに就いて考へて見るのも一興である。然しその邊に耕して居る農夫は勿論、僧侶達も殆んど無智でさうした質問には何一つとして滿足な解答を與へては吳れぬ。而も亦石に刻した碑記や名文でもあれば兎に角、それすら全くないことが多い

こんな時にはものの形やそれに附された模樣などを注意して觀察することである。初めは何にもわからなくとも、數多く見較べて居る間に色々のことが段々と知られ、果ては意外な面白味が湧き出づる樣になる

此の三つの塔は北京西直門から長河に沿うて半里餘りの場所に在る

(右)は明の中葉の臨濟派の僧侶の墓である。舊い樣式が崩れて、喇嘛塔と混血した奇形兒。石造である

(中)は乾隆頃の喇嘛の墓。相輪部が不安定だが形はそれ程惡くない

(左)は一見明代のものかと思はれる然し塼の燒成りや模樣などから推測すると、さう舊いものではない。高さは何れも一丈五尺から二丈五尺許りだ

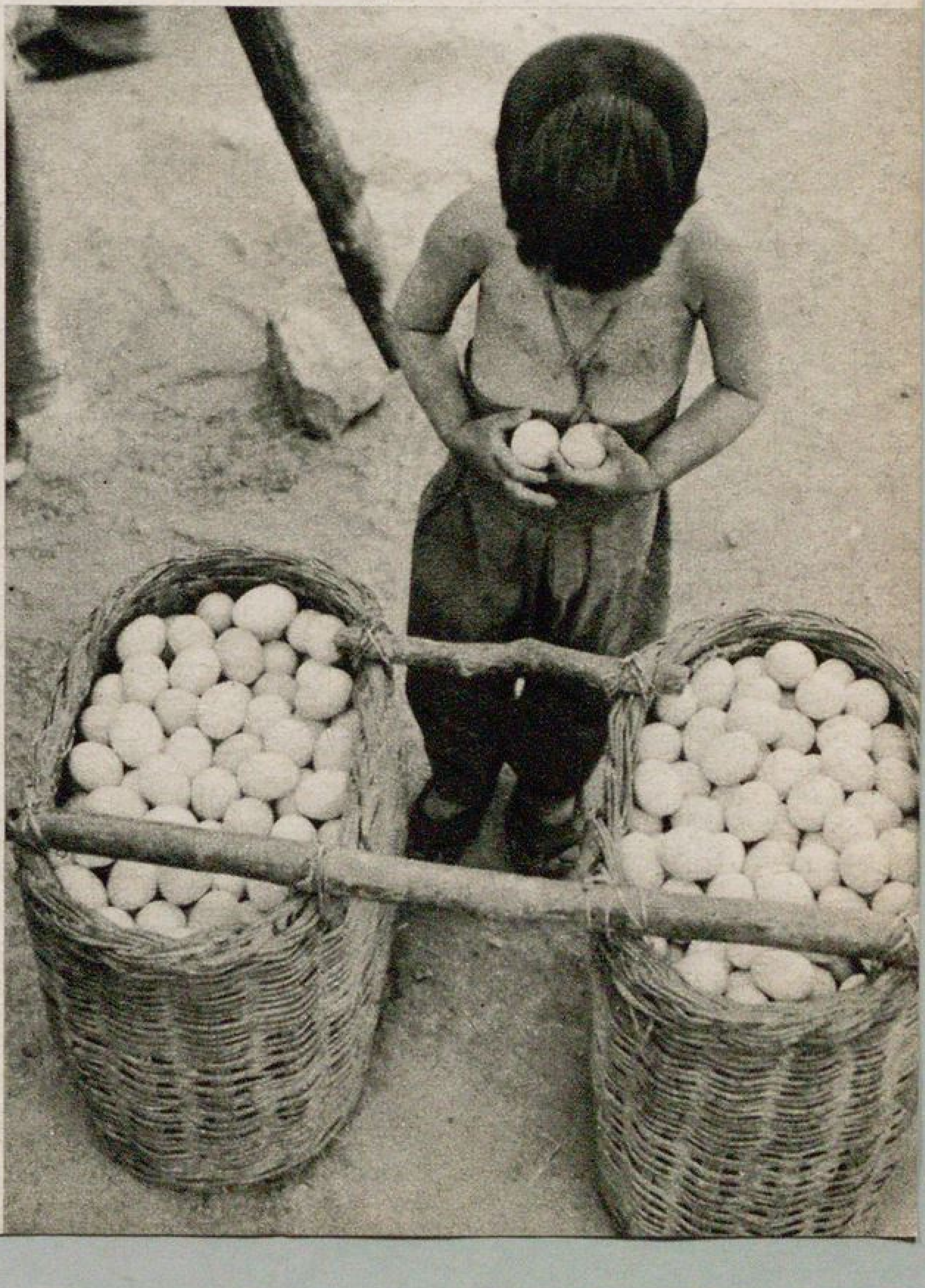


鶏と卵



北支各地にある華北交通鐵路農場では全北支の鶏の品種改良をめざしてゐる――寫眞は鐵路農場の白色レグホン

Chickens and Eggs



一個五・六錢――北京にて

北支の農村で鶏を飼育してゐないところはあるまい。北支全體の數は四千五百萬羽と云はれ、北支の農家戸數一千二百六十萬戸として一家平均三羽以上は飼育してゐると云ふ勘定になる

しかしこの鶏たるや、殆んど何千年來の在來種で、産卵數も年百を越えるやうなものはない。百姓は自分で得た卵は、盆か正月でなければ喰はない。十箇くらゐも溜まると、市に持つて行くか、村にやつて來る商人に賣る。かうして賣られる卵が一つ二つと集つて、北支の主要な産物となつて輸出されるのである

北支の百姓は、自分で雛を孵化さすことは少ない。それにはそれの專業者があつて、溫突で何千何百といふ雛をかへして、これを村から村へ賣り歩く

卵はそのままでも海外へ輸出されるが、その多くは各地にある卵粉工場で卵白と卵黄とに分けられ、乾燥粉末——即ち加工卵として輸出される。昭和十四年度の輸出額は二千六百餘萬圓、北支總輸出額二億圓の一三%を占めてゐる





Excavating Alumina

礬土（アルミニウム原礦）

アルミニウムはその優れた特性による廣汎な用途の外、マグネシウムとの合金いはゆるデュラルミン、ドウメタル、國産では住友セレクトロン等と稱する輕合金として航空機材其他に用ひられ、更に特殊合金として有たざる國々に於ける銅・錫・鉛等に置換へられつつある

アルミニウムの工業的利用は十九世紀末十數トンの生産をみて以來第一次大戰中に一段の飛躍を遂げ、今日世界産額五〇萬瓲に達してゐる

マグネシウムはそれより夙く一八五〇年に電解的製造が行はれたが、大戰中獨逸に於てデュラルミンが發明されるまでは寫眞の閃光用として使はれる位に過ぎなかつた。輕合金の發明と共に産額・技術はアルミニウムに追隨して逐年飛躍的向上を示してゐる

日本のアルミニウム工業は明治三十五年にその研究が始められてから約四十年の歴史を有するとはいへ、極く最近までは目覺しい發展をみなかつたが、昭和九年に到り稍近代的産業の形を整へ、十二年には技術・設備が一應完成して世界的水準に達した

折から事變に遭遇した斯業は急激な發展の波に乘り最近の躍進ぶりは世界の驚異となつてゐるが、これは實に明日の航空機・自動車工業の母胎たる重要な意義をもつもので、大東亞圏の盟主として頼もしい限りである

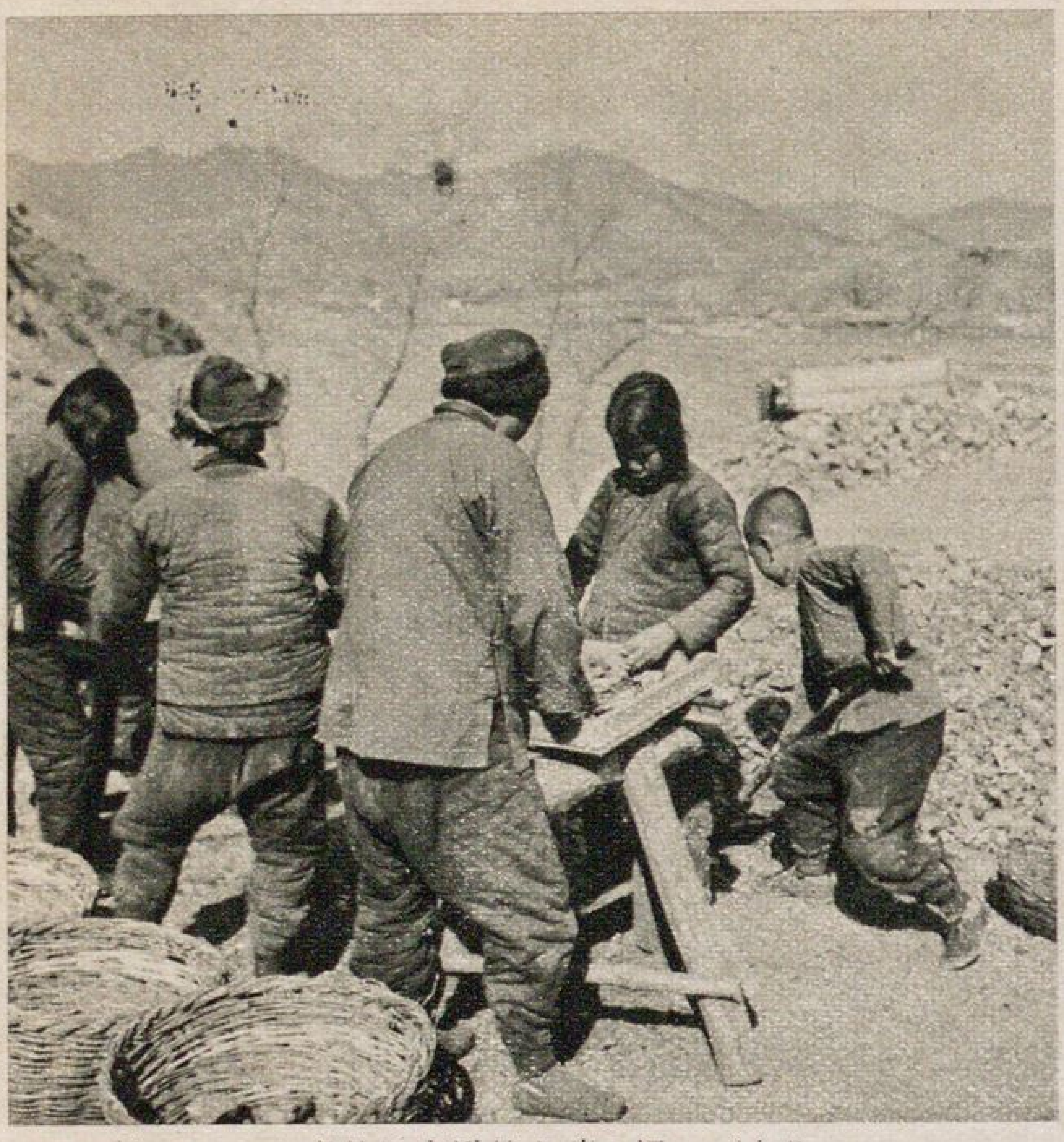
我國では從來朝鮮の明礬石及び印度・南洋のボーキサイトを主な原料としてゐるが、朝鮮・滿洲及び北支に莫大な賦存量を有する礬土頁岩乃至硬質粘土を利用する事によつて原料を無限に確保することが出來る

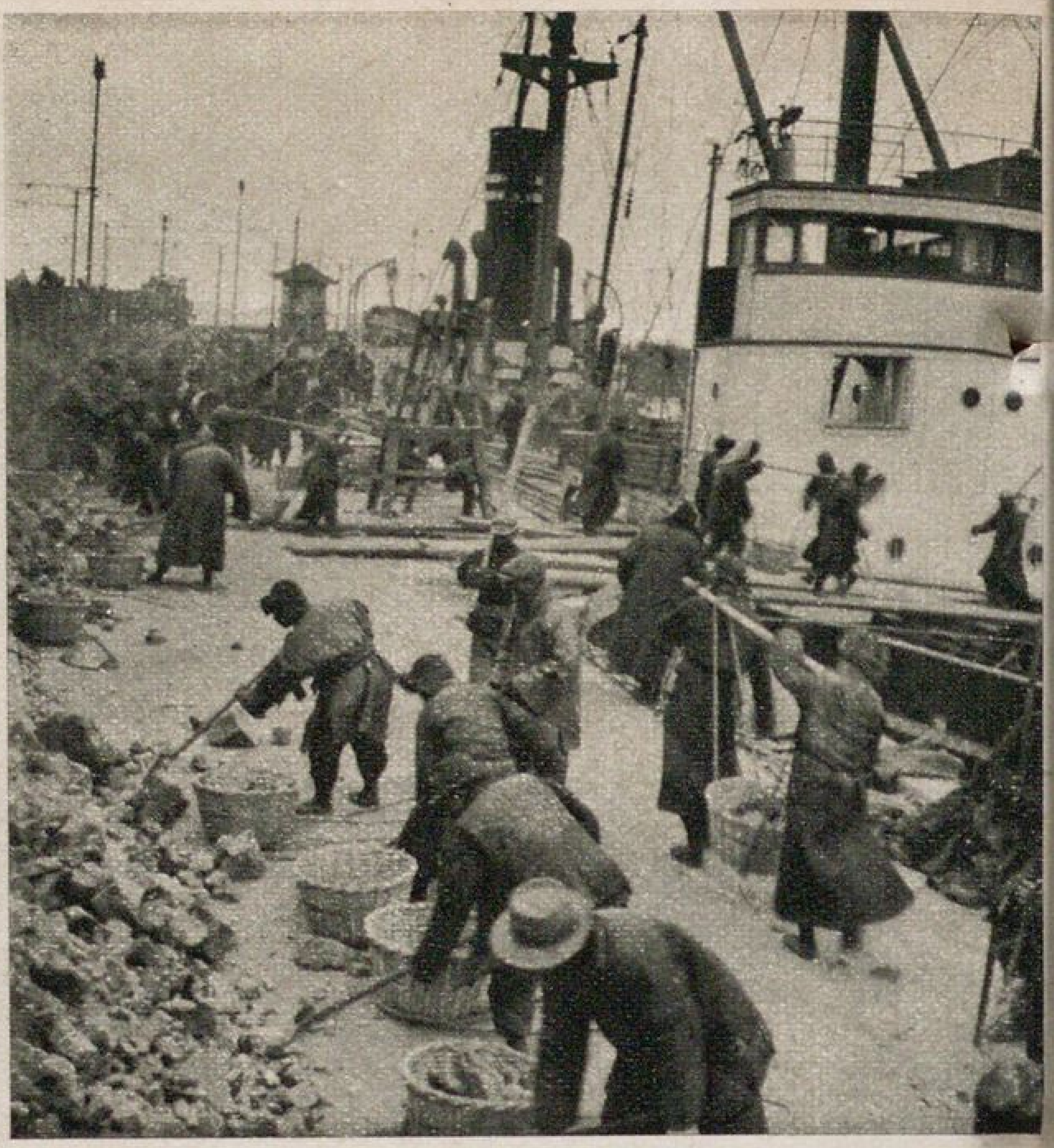
ー・ソ聯を凌ぐ世界一のマグネサイト礦床が横はつてゐる

礬土は大體石炭と併存すると云はれてゐるから、世界的大炭田を有する北支にその大礦脈があるのに不思議はないが、これは直ちに運炭線その他の施設を利用することも可能であり、開發に有利である

北支の礬土は河北・山東・山西の各省に亙つて豐富であるが山東の淄川・博山炭田一帶のものは早くから有名である。又河北省開灤炭田を中心とする唐山・古治・石門寨地方の長城粘土と稱する原礦は近年我專門家により發見された六〇――八〇%の含有率をもつ優秀礦で、華北礬土礦業會社が採掘を行つてゐる。礬土はアルミナ鑛としてのみならず、高熱工業用耐火材（シヤモツト）・研磨材（人造コランダム）等の原料としても重要な用途を有するので、同社では現地にシヤモツト燒成爐をもち耐火材の製造を行つてゐる

アルミニウム一トンの精錬には原礦により操作も違ふが、普通數トンの礦石、それと略同量の石炭及び數萬キロの電力が必要とされてゐるが、我國はその點最も有利の地位にあることは世界のアルミニウム生産國をみても明かで、獨・英・瑞西・諾威・加奈陀共に原料を國内にもたず、アメリカは南部諸洲にボーキサイトを有するが、品位の關係から南米の高級品を輸入してゐる。電力・石炭については何れか一方を缺くものが多く、原礦・石炭を陸揚げする海港の近くでコストの低い水電を充分使用し得る日本は自然的條件からみてソ聯と共に最も惠まれてゐると云はれてゐる





北支での婦人鑛山勞働者は此處がはじまりである

礦區



マグネシウムについては朝鮮・滿洲に質・量共にオーストリ

北支の花

Flowers of North China



玉蘭（ぎよくらん）　四五月の頃潔白玉の如き銀白九瓣の大花を開き其の芳香は蘭の如しと言ふので玉蘭と謂はれ、宮殿、寺廟、花圃に栽培せられる觀賞木である。紅蘇、浙江、江西省等の中部支那に産し北京では山東省曹州産のものが有名であるが、氣候の關係上喬木をなすものは極めて少いので西山碧雲寺、萬壽山頤和園等の玉蘭は珍重がられてゐる。此の花は又迎春花とも謂はれる



天師栗（しなとちのき）　北京附近では臥佛寺、碧雲寺、潭柘寺などの寺廟の庭に多い。五六月頃白色の小花が密生して圓錐狀に開き繁茂した枝葉の間に恰も白色の小塔を立てた樣なので、僧家は好んで此れを栽植する。此の木の小葉は七枚の場合が多いので七葉樹又種子が栗に似てゐるので猴板栗とも謂ひ或は梭櫳樹、桫欏樹などとも謂ひ中國特産の「とちのき」である



楡葉梅　花は梅に葉は楡に似てゐるので楡葉梅といふ。四月頃枝いつぱいに淡紅色の花が咲き一重や八重のものもあつて庭や公園などどこにも植ゑられ愛好されてる木である



合歓（ねむ）　夜に入つて葉を閉ぢ合はすから日本ではねむのきといふのださうである。支那名の合歓もその意を寓したものであるといふ。北支のどこにでも見る木であつて、寺廟の境内や、屋敷に多く、また北京・天津では街路樹として栽植され六・七・八月にかけて桃色のやはらかい花をふんわりとつける。その材は硬く、堅材を必要とする鞍、車輪、その他の器具材に用ひられてゐる



無敵！國産第一位
ムッソリーニペン
スラスラ書けて
錆びず値の廉い
國産逸品！
流線型
新生國策イリヂュウム
白金ペン付
クラウン万年筆
書きよく
體裁優美
構造堅牢
徐州
大阪 株式會社 澤井商店

近代新疆省の經濟戰（二）

小松建三郎

ソ聯の積極的貿易對策は再び新疆省に延び、歐米商業を遙か省外に驅逐した。

第四期――新ソ經濟關係の復興

一九二四年ソ聯の商業の原狀復歸と共に對新貿易は旺盛となり邊疆にその商品が充滿した。同年の新ソ貿易總額は七百十四萬六千ルーブルに上り、ソ聯の對新貿易は一九二六年歐洲大戰前の水平線に達し本省の輸出總額は年四百三十四萬四千ルーブルを示した。その後ソ聯外交人民委員會の名に於て對新經濟積極政策が叫ばれ、玆にソ聯國營商業機關が本省內に設けられ、ソ聯より工業原料としての家畜の良種が輸出され、結局新疆省は獨擅市場と化した。從つて一九二七年新ソ貿易は一躍二千萬代を超え、又一九二九年には更に膨脹した。かくしてこの四五年間本省對ソ聯貿易は戰前の貿易を凌駕すること二二%で之を表に示せば（單位千ルーブル）

年代	輸出	輸入
一九二四年――二五年	四、五三五	二、六一一
一九二五年――二六年	一〇、三三一	六、〇九一
一九二六年――二七年	一一、七五四	一〇、二三三
一九二七年――二八年	一三、五三八	一〇、六四七

年代	輸出入總額	輸出超過
一九二四年――二五年	七、一四六	一、九二四
一九二五年――二六年	一六、四三三	四、二三九
一九二六年――二七年	二一、九八六	一、五三三
一九二七年――二八年	二四、二〇三	二、八八一

第五期――トルクシブ鐵道完成後の新ソ貿易

一九二九年には本省の對ソ貿易は著るしい進展はなかつたが、一九三〇年にはソ聯のトルクシブ鐵道完成及び省內の伊犂河上流の定期船航路の開設、加之ソ聯五箇年計劃の飛躍的高度の進展に伴ひ經濟圈のブロック的基礎が確立されて行き、貿易總額は三千百九十四萬七千ルーブルとなつた。然し翌一九三一年世界經濟恐慌の波は邊疆の一角まで押し寄せ減少を示したが、同三二年には稍〻取り戾して二千八百萬三千ルーブル（內譯輸入千五百六十九萬八千ルーブル、輸出千二百三十萬五千ルーブル）まで囘復した。序にソ聯より輸入した主要品を參考までに揭載しよう。（單位千ルーブル）

織製品	二、三五八噸	一一、三三六
砂糖	一、七六六噸	九七八
油類	七四三噸	一二四
マッチ	二三九噸	九六
磁器	二九四噸	三一九
電料	九四七噸	八五六

かくて新ソ經濟ブロックは歐米資本を壓倒するに到つたが果してソ聯の勝利であつたらうか？

然し現實の問題としては何故にソ聯がかく驚異的發展を辿るに到つたか、また支那本土と比較して何故に優勢であつたか、その原因を探究する必要がある。

（イ）地理的環境

本省は支那邊疆で沙漠が連り高山脈の縱橫に依り、支那內地との交通は隔離されざるを得なかつた。上海、天津方面より假に首都廸化に赴けば百二十日以上を要し、上海、天津よりの貨物は四五箇月を要した。從つて運賃は厖大となり商賣は成立し得ぬ。新疆よりの原料品も同一步調を辿らざるを得なかつた。而も本省のソ聯に接する地帶は四千餘支里に亙る厖大なる國境を有し、ソ聯には本省を環繞する七百粁のトルクシブ鐵道を有し、最接する驛よりするなら僅々數日にして到達出來、また伊犂上流の定期船に依りソ聯商品は山岳地帶を避け、運搬上より見るも

內容

グラフ

目　高…………表紙
耕　地…………1
灌　漑…………3
農　具…………5
農村生活…………7
初　夏…………11
革細工…………13
アルバジン村…………15
花　鳥…………17
滿支國境山海關…………19
水　畑…………21
金　魚…………23
佛　塔…………25
鷄と卵…………27
礬　土…………29
北支の花…………31

よみもの

近代新疆省の經濟戰…………34
北京のシャーマン教…………36
濟寧のことなど…………38
支那傳說2…………40
潞澤地區を往く…………42
張家口發達史の覺書…………44
可園雜記…………46
北支暢談…………47
自動車北支蒙疆の統計11…………49

支那內地とは比較にならぬこと。

（ロ）對ソ工業原料供給地としての新疆省

本省は豐富な地下資源を有し金、石油、鐵、鹽等が主要物であり、農產物としては米、麥、果實、野菜、棉花などが特產で、相當額に達してゐる。又家畜は支那全省に冠たるものがある。これらは自給の外、輸出の約八〇%はソ聯で占めてゐる。最近ソ聯は棉花、絹絲、毛皮類の需要量が激增し、その供給地として新疆省に仰ぐに到つた。

（ハ）ソ聯の生產工業品のはけ口としての新疆省

本省は僻地なるが故に文明より落伍すること遙かで、工業方面は特に顯著である。從つて手工業たる家內工業も亦自給自足の域に達せず、過半はソ聯より仰がざるを得ない。而も前述の如く地理的條件に惠まれた結果は必然的にソ聯製品の使用が旺盛となり、年々激增の一路を辿つてゐる。假に數例を統計によつて一瞥すれば、

ソ聯より輸入する商品

年別＼商品別	綿布數	砂糖數	金屬製品	マッチ	ガラス類
一九三四年	一、五三六	二八三	四五	三	四三
一九三五年	四、〇六四	六三三	五〇八	三三	一五八
一九二六年	六、六九一	八五一	八五四	二二一	四三九
一九二七年	七、〇四一	六二三	一、〇六五	三九〇	一九三
一九二八年	一〇、〇〇八	一、五五六	一、六八三	三八二	一四七
一九二九年	九、二八五	一、六五三	一、四七二	四四六	四七
一九三三年	一一、三三六	九七八	—	九六	—

同表に依り明かなる如く本省の對ソ貿易中輸入は綿布を最も主とし、その額は一九三二年總輸入の七一、五%を占めてゐる。

以上に見る如く、新疆省は日常生活品をソ聯から仰がざるを得ぬ狀態にある、扨て新疆省に於ける英國、ソ聯、支那の關係を一應瞥見した譯であるが英國、ソ聯が嘗て執り來つた政策は如何なるものであつたか。「ローマは一日にして成らず」といふ。然らば彼等の政策もまた以つて西北問題に關心を有する人人の研究を要する一項目であらう。

先づソ聯の政治力方面から見るならば、廸化、哈密、科什塔城、伊犂等の各都市には領事館を設けその附屬機關として國家對外貿易機關を有してゐる。表面上はソ商保護ではあるが、實は最終目的たる思想の接近で祕密裡にこの機關は活躍し、共產主義者と連繫の下に民心を動搖せしめ、一方各種の實態調査を行ひ、經濟支配權をも把握せんとしてゐる。例へば本省內に於ける商品の價格及び需要供給は彼等により束縛され、工業原料品の對外輸出價格も購買者たるソ聯政府によつて決定される。支拂ひは總て貨幣に依ることなく、それに相應する工業製品によりバーターされるに過ぎない。換言すれば新疆省民は彼等の生產的搾取貿易の前に拱手せざるを得ない。この結果は吾人の推測に難くないであらう。

・羅文幹氏の同省視察談に依らう。「廸化、吐魯番、哈密一帶の一切の日用品（マッチ、砂糖、茶など）は均しくソ聯製品である、調査の結果によれば新疆の商業は、喀什噶爾一帶の英勢力圈を除けば、總てソ聯商業の範圍であると言つて過言ではない」と。このことは積極的政策の意味するところ實に我々にとつて興味深いと言はねばならぬ。

然らば之に反して英國は如何であつたか？ 本省の南部一帶に於ける英國の陰謀及び手段はそれに劣ることなき路であつた。一九三〇年斯坦因と哈什喀爾人との間に私的締結を結び、天山山脈に於ける油田を採掘することに起因し、一應世界注視の的を浴びたことは衆知であらう。これは失敗に終つたが、斯坦因の目的はそれに止まらず各地に於いて古物開掘もなした。近年來英國は多數の測量技師を同地に派して大々的測量調査を行ふ一方、他面には回教徒青年を誘導して、印度等に頻りに遊學せしめ、對支感情を挑撥せしめた。また喀什噶爾英領事館內には祕密裡にこの倶樂部を設け、毎日曜には講演會を開催し、回教青年の心理を科學的に應用し、支那から離脫することに汲々たるものがあつた。

かかる實情は、換言すればソ聯に對する一つの積極的なる挑戰であり、英國の勢力圈の扶殖並びに之が擴大をねらふ手段であつたことは否めぬ。

英、支、ソを廻る新疆問題が益々複雜化して來た時に支那事變が勃發した。

ここに新しく浮び出したものは日本であり、支那の全貌も漸次一變しつつある。新疆省へのルートが支那內地と結んで如何に發展して行くべきか、如何にして豐富なる新疆省の產物及び地下資源を開發して行くかは殘された一大問題である。

而も一方に於ては歐洲大戰勃發し英獨の決戰も目捷に迫らんとしてゐる。東亞の一角に於いては四月十三日日ソ中立條約が締結された。目まぐるしい變轉を續ける時局の裡にあつて新疆省は何處に行くか、眞劍に我々も亦一考せざるを得ない。

（筆者は新民會中央指導部員）

北京のシャーマン教

石橋丑雄

滿洲から西比利亞にかけて住む諸民族の生活を彩る原始的信仰として、千古の森林と、曠野の神祕を物語るものは、シャーマン教であらう。之に關しては近來漸く我が國の諸方面でも注意せられる樣になつたが、此の原始的信仰に據る祭祀が北京に於いては、數百年來この舊都に都して四百餘州に君臨した、遼・金・元・淸の諸朝によつて、いとも嚴肅に行はれて居たのであつた。

一番近い淸朝時代の事實を見ても、紫禁城の坤寧宮を始めとして、寧壽宮や馬神廟、皇城東南隅の堂子などは、何れもかうしたシャーマン教に依る淸朝帝室の祭祀が行はれた場所であり、此の帝室を中心として、各宗室や覺羅の府第は勿論、滿洲八旗や蒙古八旗の邸宅に於いても、それに準じてシャーマン教の祭祀が取り行はれて居たのであつた。

シャーマン教 Shamanism は今なほ北方亞細亞民族、卽ちウラルアルタイ系の諸民族及び原始亞細亞民族（パレアジヤート）等の間に、相當な信者を有つて居る。其の實質に就いては種々議論もあるけれども、要するに巫（女）覡(男)の如き特殊の行者が存して、專ら靈魂と人間との中間交渉に任ずる形式を持つ信仰で、現在朝鮮半島に盛んに行はれつつある巫堂（ムーダン）や、華北から滿洲各地に澤山見受けられる跳神等は、相當進化したるシャーマン教の一種と見るべきものであり、また我が國の古神道を始め喇嘛教や儒教、道教等の如き東洋宗教の中には、シャーマン教乃至其の類似の要素が相當に見受けられるし、其の外北米・南洋から阿弗利加等の土人の間にも之に類する信仰の存すること等を稽へると、シャーマン教の文化圈は相當廣汎な地域に亙つて居ることを思はせるものがある。

而してこのシャーマンの名稱に就いては色々な學說もあるけれども、結局は通古斯民族の間に存する巫覡がシャーマンと呼ばれる所に起つて居るものの樣で、又この呼び方に關しても種々の類音や類字もあるが、北京では普通に薩滿・珊滿・薩瑪等の文字が之に充てられて居る。

坤寧宮は乾淸宮と相對して交泰殿の前後に配せられ、紫禁城內廷の中央に建てられた九間重簷の大建築である。元來皇后の正殿として設けられたものであつたが、淸朝になつてからは宮中に於けるシャーマン教祭祀の神殿に充てられて居た。之は滿洲民族の間に於いて其の神を正寢に奉祀する慣例からして、皇帝の正寢は則ち皇后の正殿と云ふ見解の下に、特にこの坤寧宮が選ばれたもののやうであるが、奉天の淸寧宮や紫禁城東郭の寧壽宮も此の例に依つて居り、また北京の諸王府に於ける祭神殿の例を見ても、之に倣つて其の正殿に當る銀安殿の後方に設けられたものが多かつた樣である。

大淸會典に見える順治元年制定の坤寧宮祭神員役表に據ると、此所には十二名の官巫を始めとして、其の外に八十六名の女官、五十六名の祭官、及び二十九名の太監が奉仕せしめられて居る。此の官巫は會典に所謂賛妃女官長(二名)及び賛妃女官（十名）で、賛妃女官長は一に司祝とも稱し、祭祀に方つては最も重要なシャーマンの役目を演じたものであるが、此等が俗に薩滿太々と呼ばれた婦人達で、滿洲八旗

中の上三旗(正黄旗・廂黄旗・正白旗)覺羅の命婦中より採用することになつて居た。それから其の他の八十六名の女官を内譯すると、司香婦三十名・掌饌婦十九名・碓房婦三十七名で祭官五十六名の中には司俎官二十三名・宰牲者十名等がある。

此處で行はれた祭祀を列擧して見ると、元旦の三更に行はれた皇帝皇后の拜禮を始めとして、毎日の日祭、毎月朔日の月祭、月祭翌日の祭天禮、春秋二回の報祭及び大祭、大祭翌日の祭天禮、求福禮、四季の獻神禮及び獻鮮背燈祭等があつた。此等の祭祀に關しては一々說明するの煩を避けるが、大體に於いて、祭儀は朝夕の二回に分れて居て、朝祭には佛教及び道教に屬する釋迦牟尼佛・觀世音菩薩・關帝の三位が西の神座に祭られ、夕祭には蒙古神・畫像神・穆哩罕(ムリハン)等の如きシャーマン教特有の神々が北の神座に祭られた。此の蒙古神は蒙古人の間に於いて城壇上に祭る神に似たもので、紅衣と綠衣との兩女神が並んで居る。俗に之を明の萬曆媽々(孝定皇太后)と、清朝の先祖としての神話に殘る天女佛固倫の兩神像とも謂つて居るが、之は夕祭の神歌に「コトンノーエン」と稱せられるものので、通古斯シャーマンの間に於いて「アーヤミ」と稱する人形の變化したものではないかと思はれる。其の次の畫像神は七人の仙女を描いた小さな掛軸であるが、この七仙女は北方亞細亞民族の間に通有的な信仰の一つで、次の穆哩罕と並べて掛けられた七星鈴と共に、北斗七星を表徵するものであらう。又穆哩罕は卽ち通古斯シャーマンの所謂ブルハンで、此處のものは、鐵砲・熊・馬等の頭部を刻んだ袋入りの形であるが、シャーマン教に於いては斯うした偶像にはそれ等のものの靈(スピリツト)が宿るものと考へられ、通古斯のシャーマンは前記のアーヤミを通じ、此等の靈に祈るのを例として居る樣だ。

朝夕の祭祀には豚が二頭宛犧牲として供へられるのを例としたが、之は神前に横たへて耳に酒を灌ぎ、其の悲鳴をあげることによつて神が之を亨けた兆とし、悲鳴愈々大なれば愈々以て神慮に添ふものとされて居た。次に之を殺すのであるが、この時は極めて銳利な小刀を以て一氣に心臟を刺すので、努めて外出血を避ける方法が用ひられたが、此の時には流石に釋迦と觀音の前は之を遠慮して、兩像は一時西室に移すことになつて居た。然る後此の肉を一定の方式に切つて釜で煮た上、更に神前に供へて司祝は特殊な祝詞を唱へ、其の後で之を撤下して皆で食べることになつて居た。此處の釜の煮汁は數百年來の老湯たるの故を以つて、其の美味天下第一と稱せられ、祭祀に與つた人々は之を椀に盛り指でつまんで食べ、時には、皇帝皇后も出御して共に召上ることもあつた。

かうした祭儀は夕祭に於いても略ぼ同樣であるが、只夕祭には最後に背燈祭と云ふ暗(クラガリマツリ)祭が行はれるのを例とした。卽ち神燈を黑帳で覆うた、上宮内の燈を全部かき消した暗黑の中で、司祝は腰に腰鈴を卷きつけて跳り廻る儀式であるが、此の時司祝は一種の神憑り狀態に入つて、腰鈴がポンポン切れて飛び去ることがあり、かうした時は神の滿足を招來したものと考へられた。

一體坤寧宮は外觀的にも他の宮殿とは非常に異つた所がある。卽ち窓の格子が縱格子になつて居ることや、格子の紙が外側から貼られて居ることや、中央に開かれる筈の入口が東方に偏して小さく設けられて居ること等であるが、之は清朝時代の祭神殿の制式で、この入口の正面には高さ一丈四五尺の木桿が立てられて居る。卽ち神桿で俗に祖宗桿子とも稱せられ、滿洲旗人の有つ特殊な祭具の一つで、之を用ひて毎月祭天禮が行はれて居たのであつたが、此の祭天禮は其の内容を檢討すると、實は祭天の名の下に清朝の先祖を祭つた行事であり、其の先祖として祭られたのは卽ち鵲であつたが、之はかの清朝發祥の神話から起つたもので、愛親覺羅氏は鵲の齎した赤い玉を呑んで姙つた天女の子孫と信ぜられた事に因る祭祀で、要するに清朝の帝室は鵲のトーテムを有つた氏族として、卽ちトーテミズムに基いたシャーマン教の祭祀が行はれたのであるが、神桿の上部に挿れた豚の頸椎と圓形の椀とは、見る人をして神祕的な感じをそそらしむるものがある。

祭神殿の東房は卽ち皇帝大婚時の洞房で、皇后は入内と共にシャーマン司式の下に、初夜のローマンスを其の北床で綴られたものであつた。

かうしたシャーマン教關係の祭祀の行はれた址は、紫禁城内にも寧壽宮や馬神庙等があり、北京飯店の西には堂子の一郭が殆んど原形のままで殘つて居る。

ただ民國以來旗人達が急に零落した關係上、この民族的な祭祀が出來なくなり、爾來年と共に忘れられつつあるのを見ると、此等の人人の爲めに無限の寂しさを覺ゆるものである。

(筆者は北京市公署觀光科專員)

濟寧のことなど

島田正郎

元の世祖忽必烈が、國費を江南米に仰ぐべく、隋代の開浚にかかる江南河、山陽瀆、通濟渠と相連絡し、南北支那を通ずる一大幹線建設のため、黄河、衞河を結ぶ最短距離に運河を開鑿し、自ら會通河と命名したのは、至元二十六年のことであつた。その沿岸に位することとなつた濟寧が、南北支那漕運上の要衝として、マルコ・ポーロもその旅行記に、“Sunju-Matu”の名の下に、繁榮を物語る程に榮えたのも、全くこの時に始るのである。當時工事不備のため水深淺く、漕運上にはなほ十分とは言へなかつた會通河も、明の洪武二十四年の黄河氾濫に、全く淤塞して廢渠となり終つた。然しながら潘叔正の上奏の結果、永樂九年大規模の開浚を行ひ、ここに全長三百八十五支里、深さ十三尺、幅三十二尺、十五の閘による水準調整の設備を有する會通河が完成した。殊に永樂十三年海運をやめてより、國費たる江南米四百萬石は、年々すべて大運河によつて江南の產地より北京の宮廷に運ばれることとなつた。明に次ぐ清も亦これにならつたので、沿岸の諸港市の繁榮はその極に達し、支那における大河運時代を現出することとなつた。ここに述べる濟寧も亦、その重要なる港市として、その繁榮は正に元代のそれを遙かに凌駕するものがあつた。就中宣德年間迄この地に濟寧倉なる水次倉も設けられ、支運所の一として榮えたことは、人のよく知る所である。周九支里を有する今日の磚城の築造されたのも、全くこの頃の事實である。尤もこの地には、漢代既に任城縣が置かれ、爾來多少の變革こそあつたが、魯南平野の要地として重要視された。濟寧の名の始めて用ゐられるやうになつたのは、元の至元十二年のことにかかるが、既に早く五代の周は、濟州をここに置き、宋金ともにこれに從つてゐたやうである。

されば濟寧を中心として、附近には歷史上重要なる古蹟も亦少くない。先づ注目すべきは、今日縣公署東廂内に保存される八個の漢碑である。傍らの碑記によると、始め文廟戟門内にあつたのを民國十八年十一月ここに遷したことが知られる。

㈠漢北海相景君碑（本初元年）
㈡漢郎中鄭固碑殘石（延熹元年）（壁間）
㈢漢執金吾尉武榮碑（永康元年）
㈣漢郭泰碑（建寧二年）（背面畫家）
㈤漢司隷校尉魯峻碑（熹平二年）
㈥漢尉氏令鄭季宣碑（中平三年）
㈦漢石朱君長碑殘石（年號未詳）（壁間）
㈧魏廬江太守范式碑（青龍三年）

これらは山東省に於いては、曲阜孔子廟碑林に次ぐ漢碑で、現在その保存は決して惡くはないが、縣警備隊の駐在所にあてられ、顧みる人とてもない狀態にあるのは、いささか物足らぬ感を抱かしめる。

縣公署の隣、今日警察隊となつてゐる武威殿には、一基の鐵塔が存する。塔は二丈ほどの磚築基壇上にあり、高さ三丈、九層、八角、細身にて、每層東西南北の各面には、各一個の窓を有し、他の面には、夫々二個の佛坐像がある。第一層東南面に存する「大宋崇寧乙酉」の銘によつても知られる如く北宋徽宗朝の創建なること明らかである。塔は上部の一部を除くほか、保存きはめて良いが、基壇より生じた蔓木が、殆ど塔身のすべてをおほひ、美觀を失すると共に、保存上にも寒心すべ

き狀態におかれてゐる。

次の城の西北隅、今日第三監獄となつてゐる普照寺は、齊梁の古刹と傳へられ、大雄寶殿の前には、後唐寶曆二年の尊勝陀羅尼幢もあつて、先づ唐以前の剏建と考へられる。大雄寶殿及び背後の藏經殿は、共に見るべきものもないが、門外に存する十三級の明代の石塔は、大きくはないが、形整ひ美觀を呈してゐる。

さて濟寧は又李白、杜甫曾遊の地として、その詩に名高く、又二三の古蹟を存する。先づ太白酒樓は、南門の東城壁上にあり、現存のものは二層にして、第二樓の棟木には、

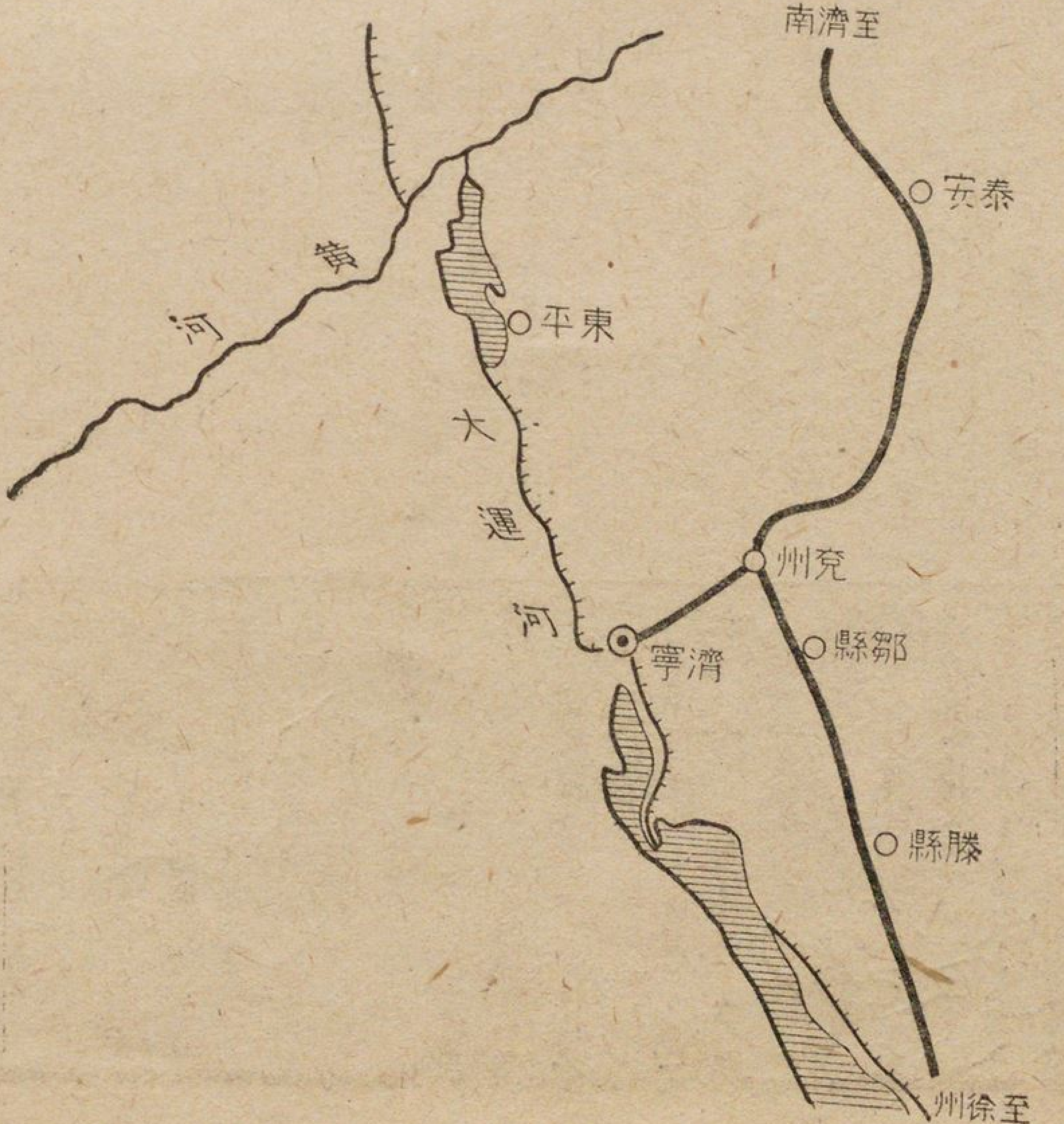
清光緒九年(癸未)孟冬道員用候補知府兗州府運河同知沈〇〇重修

の墨書がある。樓の內壁間には詩碑多く、中には至元、延祐、泰定、天曆等の年號を有するものもあり、正面には杜甫、李白、賀知章(縣令)の像を刻した碑がある。樓は太平廣記によると李白が任城に客となつて居た時、詩を賦した所とされてゐるが、當時の酒樓は、位置亦現在と異り、今の翰林街にあつたものと考へられるが、複雜な考證は一切省略する。さてこの足下に南池と稱する低地がある。普通には、杜甫が許生簿と舟遊した處と傳へられてゐるが、實は明嘉靖中鑿つたもので、唐の南池は城南三支里、小南門外に存する。今日は共に涸渇して、昔日遊觀の樂みはしのぶべくもない。又東門外には、杜甫が筆を洗つたと傳へられる浣筆泉がある。

さて濟寧は、津浦鐵路の開通に伴ふ河運時代の閉幕と共に、昔日の繁榮を失したが、なほ德縣、徐州方面との運河による交通も行はれ、且つ附近農產物の集散地、加工地として、はたまた魯南道尹公署所在地として、その面目を保つてゐる。殊に會通河の貫流する南門外南關一帶は、商盛殊に殷賑にして、運河の傍らには、飯館、酒樓、澡堂、飯店等櫛比し、港市らしい情緒に富む街並を呈してゐる。一方この南關は、回敎徒の居住地として、その數千四百に達し、東大寺、西大寺の二淸眞寺を擁する。外觀に於いては前者勝るも、內殿に於いては後者豪壯、共に明末淸初の建築なるべく、前者は民國二年、後者は同五年の重修を經て、殆ど破損もなく、城內外にその威容を誇つてゐる。共に老齡の阿鴻(アホン)があつて、附近居住の回敎徒の宗敎的、經濟的團結の中心となつてゐる。この地には又中國回敎總聯合會山東支部も設けられ、山東における回敎運動の中心となつてゐることは、識者のつとに知る所であるが、濟寧回敎徒の歴史的考案は、別の機會に讓り、ここには一切ふれないこととする。

(筆者は外務省留學生)

濟寧附近の地圖



支那傳說 2



武田光郎

一、油賣りの男

この話は何時の頃のものであるかくはしいことは解りませんが、北京に起つた事件です。

宣平坊に住んでゐた官吏が召使を連れて、夜晩く或る胡同を通りかかりました。丁度冬のことで家々の土塀からは楡の枯枝が手を擴げた樣に突出てゐます。夜も更け渡り、寒月が冴えて、それはそれは氷りつくやうな、寒い晩でした。急ぎ足で歩いてゐますと、ふと前の方から驢馬の足音が聞えて來ます。それがだんだん近づいて來て官吏の前まで來ると、どうしたことか、ぴたりと立止まつたのです。

月の明りでよく見ますと一人の油賣りの男が驢馬に跨り威張つてゐます。胡同は狹いのに油賣りの男は突立つたままよけて與れません。腹を立てた官吏の召使はいきなり油賣りの頭をなぐりつけました。するとどうしたはずみか油賣りの頭がぽろりと落ちて、大きな門のある家へ、ころころと音をたてながら、ころがり込んで行きます。二人はびつくりしながら、その後について門の中に入つて見ました。大きな槐の木の下まで行くと、その頭は消えてなくなつたのです。不思議に思ひその家の人に知らせ、槐の木の下を掘つてみますと、深さ數尺の根の下に大きな蝦蟇が二つの筆のさやに重なる樣にして、じつと腹這つてゐるではありませんか、そしてその筆さやの中には水が一ぱい入つてゐます。又その傍に城門の扉に附けた環の樣に大きい白きのこが落ちてゐました。

その後陰陽師を呼んで尋ねて見ますと、蝦蟇は驢馬、筆さやは油桶、白きのこは人間になつて油を賣歩いてゐたことが解りました。

この油を買つた人達は一月餘りその油が安くて品質が好いので喜んでゐましたが、やがて食べた人達は病氣に罹つたり、嘔吐を催したりしたさうです。

二、鵝鳥籠

陽羨に住んでゐた許彥と云ふ人が綏安山に登つた時の話であります。十七八ばかりの書生が大變苦しさうに路端に寢てゐるので、その故を尋ねますと、

「ひどく足を痛めて、歩くことが出來ません。貴君は鵝鳥籠を持つてゐる樣だが、私をその中に入れて與れませんか」

許彥は冗談だと思ひながらも、書生の頼みが眞劍なので、籠の中に入れることにしました。籠は小さく、その上書生は大きいので籠の中は一ぱいになつたのですが、鵝鳥は一つも驚かず、丁度夫婦の樣にちやんとしてゐるのです。許彥は籠を背負つて歩き出したが重いとは思ひません。程なくすると、林があつてこんもりと茂つてゐます。或る涼しさうな木蔭を選んで休むことにしました。書生は籠から出ると許彥に向つて

「大變御迷惑をかけました。そのお禮にささやかですが御馳走を致しませう」

と言ひながら口をもぐもぐさせてゐますと、見る見る中に綺麗に磨いた銅の壺を吐き出しました。壺の中には美味さうな珍奇の食物が澤山小皿に盛られてゐるではありませんか、その壺や皿は當時珍重された銅であり、しかも料理はプンプンと好い匂がして、滅多に見ることの出來ないものばかりです。暫くの間酒を汲み交してゐますと書生は、

「たつた二人きりでは淋しくて仕方がない、私に一人の女がゐるからそれでも呼んで見ませう」

と言ひながら又口をぶつぶつさせますと一人の女が出て來ました。十五六歳の、衣服は煌かで天女と見違ふばかりの美しい女です。宴に坐して共に食ひ且飲んでゐますと、書生は醉つて心持よく寢て仕舞つたのです。暫くすると女は許彥に言ひました。

「私はこの書生の妻です。貴君の目には睦じさうに見える樣ですが實は大

へん不滿に思つてゐます。それで祕かに一人の男を持つてゐます、夫が寢てゐる間に呼んでみませう。しかし誰にも喋つてはなりませんよ」

と、口の中から、一人の男を吐き出しました。年は二十三四、賢さうな男です。その中に書生が目を覺しさうになつたので、女は素早く口の中から一枚の錦を吐き出して、書生と許彥の居る場所を遮り、書生の方へ行つて寢込んで仕舞ひました。

殘された男を見ますと、眉目秀麗とはこの樣な男のことを云ふのでせう、繪の中から拔け出た樣です。裾や袖口には鮮かな衣色がのぞいてゐますし、銅の飾りのついた帽子を戴いてゐました。男は寂しさうに許彥に申しました。

「この女は大變私に親切です。しかし私を滿足させる樣な情の深い人だとは思ひません。そこで私も女を匿まつてゐます。お見せしますから他言してはなりません」

男は二十ばかりの可愛い女を吐き出しました。一緒になつてしばし遊んでゐましたが、幕の內から「ううん」と云ふ書生の聲が聞えて來ました。男は

「二人とも目を覺した樣だ」

と、周章てながら、婦人を呑込みました。暫くすると幕の內から女が出て來て男を呑み、許彥の前に坐りました。

——あたりは、とつくに日が暮れて眞黑闇です。遠くの方で狐の泣き聲が細細と聞えて來ます——やがて書生が起きて來ました。

「大變永い間寢てゐて失禮しました。貴君は一人で怪異な事を憂へてゐたのでせう。已に日も暮れた樣です。殘念だがお別れせねばなりません」

と、一氣に女と壺や皿を呑んで仕舞つたのです。書生は別れる際、

「何も貴君のお役に立つことが出來なかつたが、一生今日の御恩は忘れないでせう」

と云つて、二尺ばかりの銅の大皿を殘して行きました。

——殘された許彥は暫くの間夢を見てゐるやうな心持でその場を動くことが出來ませんでした。許彥は、その後大元年間に蘭臺令史といふ位につきました。

三、千 日 酒

狄希は中山縣の人で千日酒を造ることが出來ました。この酒を飲むと千日醉ひ續けると云ふ珍しい古今獨特の酒です。當時、有州に居た玄名石は大變な酒好きで、それこそ文字通り一日斗酒をも辭せずと云ふ酒豪でした。色々と酒を飲んで見ましたが、どれもこれも飲み飽きて仕舞ひ、好い酒はないものかと探してゐますと、この千日酒のことを聞いたのです。矢も楯もたまらず狄希の家へ馳けつけて、千日酒を求めました。狄希が言ふには

「私の酒は未だ十分飲むまでには出來上つてゐないのだ」

根が天邪鬼の玄名石ですから、出來ないと云はれれば尙更飮みたくなり、

「どんなものでもいいですよ、一杯だけでいいから飲まして下さい」

と泣言を並べました。狄希は再三斷つたのですが、玄名石はどうしても聞き入れません。

「どうなつても構はない」

と言ふので、狄希は仕方なく「一杯だけ」の條件で與へました。玄名石は勇み立つて家に歸り、早速飮みますと、みるみる中に體が硬直して、それきり死んで仕舞ひました。家の人は何事も知らないので、大へん嘆き悲み、形の如く之を葬りました。——それから三年がまたたく間に經ちました。狄希は玄名石に與へた酒のことを想ひ出し、彼の家を訪ね、家の人に玄名石の安否を尋ねますと、人々はけげんな顏をしてゐます。

「もう、とつくに玄名石は死んでゐませんよ、あれから三年になるのですから」

狄希は吃驚しました。

「それは酒のためだ、千日眠る酒を飲んだのですから、死んだのぢやありませんよ、今日が丁度その醉のさめる日です」

狄希は家の人々と玄名石の葬つてある塚へ行つて見ますと、塚の上は汗をかいた樣にびつしよりと水氣をふくんでゐます。そこで塚を鑿き棺を開けて見ますと、丁度玄名石の醉の醒める時でした。玄名石は目を開き、口をあけて大きな聲で叫びました。

「ああいい氣持だ。ほんとにいい氣持だ、何んとよい酒だつたらう、しかし俺はどの位眠つてゐたのか知らん」

この聲を聞いた墓の上の人々は、みんな大笑ひをしました。玄名石を棺の中から引き上げて見ますと、體からはまだ强い酒の匂がして鼻を强く衝きました。——玄名石が元の體になるまでには三箇月を要したといふことです。

（筆者は華北交通資業局員）

東潞線を往く

板屋　猛

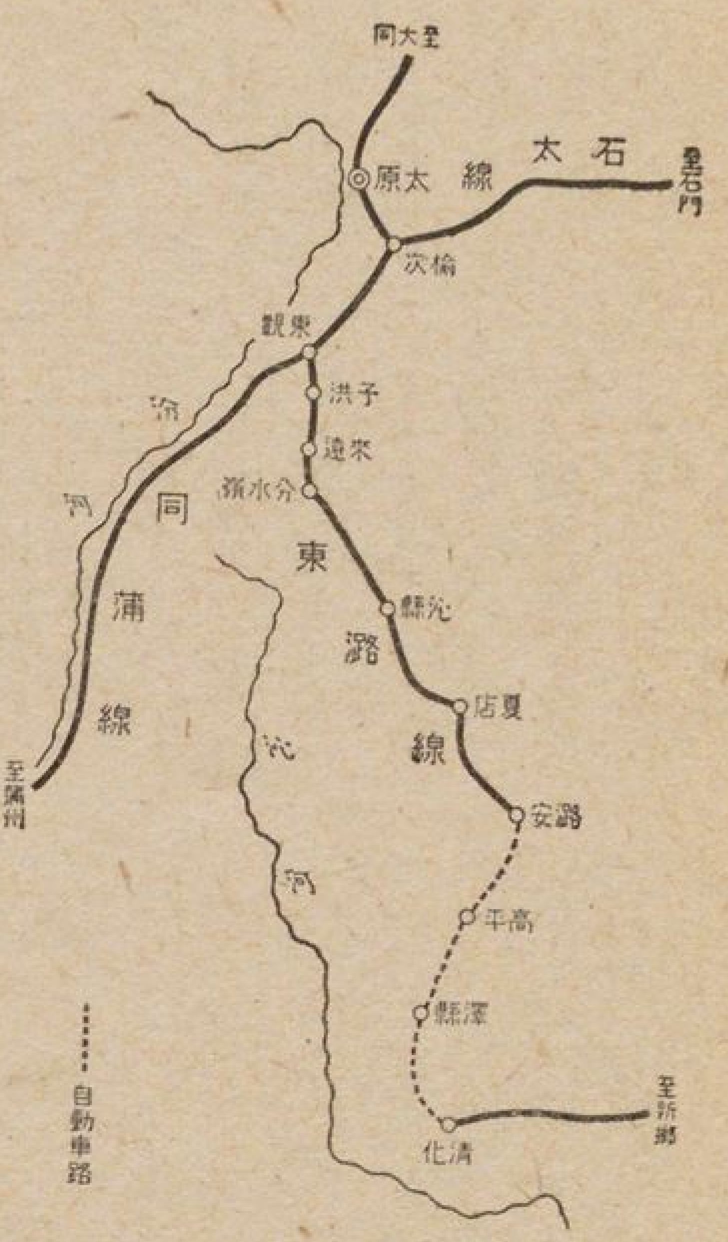
東潞線開通第一列車が山西省の首都太原驛を發つたのは三月十五日朝八時十分、山西の春未だ淺く畠も丘も褐色の膚て生色はない。ただ機關車の前にひるがへる眞新らしい日章旗と五色旗とが今日の喜びを沿道にふり撒いてゆく。軌幅は一メートルの狹軌であるが路盤も枕木もきちんと角が立つてゐていかにも新線だとの感が深い。昭和十三年の潞安作戰直後から鐵道敷設の必要を痛感せられ、翌十四年六月軍鐵道部隊と華北交通會社との協力の下に著工せられたもので、大行山脈の峻嶮を縫ふこの路線の難工事は屢〻傳へられたところである。初め作戰上の急に應ずるため全線を數區間に分けて工事を推進し、輕便軍用鐵道を敷設したのであるが、これと竝行して大型軌道の建設を進め、本年二月末、全線百七十キロが一貫的に開通したのである。

南同蒲線を東觀で分岐して東南に進む。太原盆地の南の端れに當つてゐて一帶に黄土の耕地である。子洪附近から車窓の景觀が一變して處々に黄土の雨裂が現はれる、線路の右手沿ひに汾河支流の河原が隱見し、山裾はまだ遠いがやうやく山岳地帶に入りつつあることが判る。河は北流し水は碧く澄んでゐる。平地には小石が多く白く干からびてゐて殆ど住家を見ない。棗の木が裸の小枝を張つて密生してゐる。

盤陀の附近から黄土の切取りの車窓に迫る度合が頻繁となり、上り勾配が強くなる。山には殆ど木が無い。高さ數十尺の黄灰色の斷崖が牙をむき出したやうに深い陰影を刻んでゐる。なだらかな丘陵の一端が忽然として垂直に裂け、今にもどどつと崩れ落ちさうな物凄い龜裂をなしてゐるのである。山の傾斜面には青黒い岩石が露出してゐる。その頂は、粉をふりかぶせたやうにくつきり黄色の表土を見せてゐる。低地と山頂に黄土の發達が見られるのである。北支の黄土が中央亞細亞の乾燥地から風によつて運ばれてきたといふ說には一部に多少の疑問もあるやうだが、この景觀を見てゐると如何にも空から降り積り、それが風によつて吹き寄せられたといふ感じである。高い切取りの斷面を見ると、砂岩層の上に粘土質の土壤が積はり、その上に黄土の層が推積してゐる。列車は河谷に沿ひ斷崖を截つて進む。

來遠では、五十人餘りの愛路少年隊が驛の構内に堵列して列車を迎へてゐた。紺の綿服は膝のあたりが大抵破れてゐて綿がはみ出し、鞋も帽子もツギだらけであるが、みんな六角の新らしい隊杖を握り白い腕章を卷いてゐる。そしてどの顏も口許がしまり眼尻が切れてゐて激しい山西人の氣性が漂うてゐる。泥焦けとも謂ふべき赧黒い頰、しやんと胸を張出した姿態には、京津地方の子供たちには見られぬ逞しいものがある。この少年たちこそ鐵道の建設と同時に赴任してきた華北交通從事員の撓まぬ努力の結晶なのである。山一つ越えた向側には今でも共產軍が頑强に根を張つてゐて、鐵道沿線の部落に潛入し村民を煽動して執拗に鐵道施設に妨碍を加へる。この共產軍に挑戰して彼等の魔手から奪ひ取つた愛路村であり、愛路少年隊である。彼等に一民愛路、萬民享福の關係を知らしめ鐵道擁護の觀念を植付ける、これはそのまま日支の提携となり敵への防砦を築くことになるのである。黄土一色の蕭殺たる世界に、新時代の息吹きに目覺めた双葉が伸びつつあるのだ。突風がさつと足許の砂を捲上げて驛舍も人影

も掻き消してしまふ。その黄塵の中に隊杖を捧げて列車を見送る少年たちの眼差しに不屈のものが宿つてゐた。
　來遠を出て間もなく荒々しい岩膚をむき出した長い第二隧道にかかる。列車の震動のたびに今にもガラガラと崩れ落ちさうで氣味が惡い。事實、時々落盤があるさうである。この列車もそれを警戒して徐行したのだが機關車のシリンダーを岩にぶつつけてしまひ、隧道を出たところで一時間半も立往生した。物資も人も不足、しかも險しい山坂にひた押しに鐵道を敷いたのであるから、勾配にも路盤その他常識では到底列車を通せぬやうな無理な箇所も尠くないのだ。この先でも分水嶺に着く迄に、切取りの崖崩れのため列車は數回停車せねばならなかつた。殊に或る地點では苦力の手に負へぬほどの大岩塊が線路を塞いでゐたので、數發のダイナマイトを仕掛け、乘客は次の驛まで歩かされたのであつた。



　大行山脈に圍繞されたこの邊りの特殊な地質構成のせゐであらうか、恐ろしく亂脈な岩層である。その岩の隙間に張つてゐた氷が一陽來復して解け初めたので岩盤が脆くなつてゐるのだといふ。處によつては窓から手がとどくところに四、五十尺もの斷崖が突立つてゐる。ここ當分は落盤が絶えないだらう。また黄土の部分は、一度大雨に見舞はれると忽ち流されてしまふ。深い切取り箇所、高い築堤は脆くも崩れ落ちるのである。七、八月の雨期には二箇月位運休の覺悟ですよ、と同乘の建設事務所の人は話した。かういふ黄土の山岳地帯における鐵道の建設や運營には特殊な苦勞があり、今後の研究に俟つべきものが多いやうに思つた。
　南關は黄土の丘の上に在る。その中間を截り開いて線路が通つてゐる。東と南には高い山が迫り、西と北は廣い河原であつて、その名の如く險要の地をなしてゐる。共產軍の襲擊が絶えないといふ。此處にも十數人の愛路少年隊が居た。部落民は女も子供も穴居の窓から顔を出して、列車を見送つてゐた。分水嶺は標高千三百メートル、文字通り分水嶺であつて、それまで北流してゐた河は此處で盡き、この附近から、漳河の支流の濁漳北源が發してゐる。車窓からその分流の方向が判別されて面白い。この朔漠たる山奥の寒驛に晴れやかに紅白の幔幕を張り巡らし東潞線開通の式典が擧げられた。式半ば、黄砂を含んだ凄じい颪が吹き出した。三月も半ばといふのにその風は膚にしみて冷たい。建設殉職者の白木の碑が吹き捲る砂塵の中に耀いてゐた。
　鐵道は奥へ奥へと伸びていく。そして鐵道を建設した人たちは次々とその驛舍に腰を据ゑ後方から派遣されてきた同僚と共に鐵道の運營に任ずるのである。日本人は驛長と警務分所長の二人だけといふやうな驛がこの東潞線では珍らしくない。きのふまで百姓だつた部落民が驛員に採用される、今度初めて汽車を見たといふ連中だから鐵道の事など西も東も判らないのが當然、土民が「驛員」の腕章を著けただけのものである。驛舍の周圍に銃眼を開いた土塀を造り、その中に中國人と起居しつつ彼等を訓練するのである。勤務時間も交替もあらう筈がない。人手はぎりぎりだし敵は直ぐ近くに蠢動してゐるのである。沁縣に向ふ列車の若い車掌は山西に派遣されてきて三、敵襲には慣れ切つたといふ落着いた口調で共產軍の最近の鐵道妨碍の遺口をいろいろ話してくれた。また或る驛を通過する際、この列車に乘つてゐる警務段長に、手榴彈を二十箇ばかり至急送つて下さいと驛長が訴へてゐた。
　九時、眞暗い沁縣驛に著く。東觀と潞安のほぼ中間である。縣城の南門を護る日本兵の顔は鐵兜の下に黑々と凄壯であつた。古びた鐵扉を開くその兵隊の服は泥まみれであり眼玉が白く闇の中に光つてゐた。朝七時、鳶がしきりに鳴き合つてゐる、十九日の月はまだ皎々と空に殘つてゐた。鳶についで雀、烏、鳩が朝を告げる。漢朝は此處に銅鞮縣を置き、隋、宋にも地方の重鎭とせられ、金の天會六年、沁州となつた。西北に伏牛山を負ひ、前面は濁漳河に臨み、南北西の三門を持つ古城郭であるが、數回の戰火を浴びて城壁は崩れ屋根は落ち宛ら廢墟である。南門の上に天會十二年の刻銘ある青錆びた鐘が半ば土中に埋れてゐた。（未完）

（筆者は華北交通資業局員）

張家口發達史の覺書

（新築來遠堡記以前）

今村鴻明

張家口は商業都市として發展してきた町である。この町を稱して西歐人はカルガンと言ふ。この語の意味は關門である。蒙古語のハルガ（關、口等の意）が語源であると言はれてゐる。張家口は關門の町である。これらの呼稱に現はれたる關口の都市が卽ち張家口の特色である。

事變前の張家口は萬全縣城の所在地であつた。萬全の地勢は高原大陸をなしてゐる。沙漠北にあり、南北に群山錯峙し、洋河が南境を橫貫してゐる。外は蒙疆に連なり、內は華北の屛藩をなす。萬里の長城の一關門に當るのである。縣志にはこの狀況を說いて「その形勢の衝要たる他縣に比ふべきものなし」と記してゐる。縣境は遼・金時にありては軍事の中心をなし、明・淸にありては北邊の鎭鑰をなす。山嶺環り峙ち、固く吾れを防ぐに足る。その關隘の最も著名なるものに、大境口がある。大境口とは張家口の北邊をなす邊關の咽喉である。明はここに防守を設け、淸はここに總督を置いて、以て保衞に努めたのである。ここより東北に向へば沽源、多倫に通じ、更に熱河に達するのであり、西北は康保を經て庫倫に達する。かくの如く大境口は交通の要衝であり、しかも山勢迫り河水を繞らすの天險である。かくて現在、大境門外西溝は蒙古貿易の交易場となつてゐるが、この張家口の地理的條件、卽ち地勢の險要と、交通上の要衝であるといふ點は旣にして未だ人住まぬ昔から輝やかしい將來の都市の發達を約束してゐる自然であつた。

だんだんに、考察が遡ることとなるが、この惠まれたる自然境の發生の時代は判らぬにしろ、どのやうにして生れてきたかは想像される。蒙古高原は大きな一つの舟狀盆地をなしてゐる。それは高原の緣邊が高く、高原內部に行くに從ひ、僅かながら低くなつてゐる地勢であつて、その緣邊は厚い山脈に遮られ、高原の河流は容易にこれを突破出來ずに、激しい乾燥的氣候のもとに多くの流れの末を沙地に消した尻無し河になつてゐる。しかしこのやうな一般的傾向の特異例として、處々にこの山脈を突破して流出口をきり拓き、海にまで流れ出てゐる河もある。これらの激しい河流が厚い山脈をきり拓いて流れ出る邊りは言ふまでもなく極めて險難な地勢をなす。このやうな河の一つとして淸水河がある。

張家口の町は海拔七百米餘の高原にあるが、蒙古人はその張家口が水の中にあると言ふ。水に對して危險極まりないと言ふ。張家口の位置する盆地は淸水河と、正溝、西溝の三つの河水の合流點下流に展けてゐる。これらの河流が山をきり、土砂を堆積して出來たのが張家口の盆地である。ところでこれらの河流の流域――勿論流域ばかりではない――は支那一帶に見らるる通りの禿げ山である。表土の洗ひ盡された岩山には到底樹木が育たない。當地方の雨季は七、八月の極めて短期間に限られてゐるから、これらの雨水は樹木のない山間地帶には一年を通じて保留出來るものではない。したがつてこれらの河川は一年の大半を水涸れた河原道として交通の便に供してゐる。

この自然に人力が加はつて始めて人類史上に張家口の登場がある。

魏の土地記にある下洛（今の宣化附近）の西北百三十里に大寗城、又西二

十里に小寧城があるといふ記錄によつて、保安州志を記した楊氏は大寧城は張家口、小寧城は萬全縣だと言つてゐるが、これは北魏の當時のこと、卽ち今より一千數百年の昔である。

また金代に於いてはかの成吉思汗が張家口附近の野孤嶺に陣して金軍と對峙し、金軍を破つて張家口より關內に侵入し、宣化を陷し、居庸關に迫つたと言ふ記錄もあるが全て餘りに斷片的なものでしかない。

張家口の名が現はれたのも明代に入つてからである。宣德四年、張文なる者始めて張家口堡（下堡）を築く。しかし下堡の築城から上堡卽ち來遠堡が汪道亭によりて萬歷四十一年築かれるまでには二百年に近い歲月が流れてゐるが、この間の情況も決して明ではない。ただ、この間については當時の蒙漢政治關係を背景として、多少の記錄を參考に次のやうな簡單な想像だけは許されよう。

まづ張家口の町は、汪道亭の「張家口新築來遠堡記」に言ふ「敵來市するや、卽ち我は吏士商民を率ゐ、糧をつつみ、北に向ひてこれを迎へ、蕃漢入り混じつて有無を貿易し、尊卑の區別なく野に寢て、市終らば各〻去る」のやうな互市の場である。張家口の互市は明會典に俺答との關係から曾つて宣府、大同、延綏等十一處を開いて蒙漢通市の區となし、「開市は凡そ十一處、大同にあるは三、得勝口、新平、守口となす。宣府にあるは一、張家口となす。云々」

かかる互市の開催始末は、王崇古の「上封貢宣八事疏」に「嘉靖中、俺答衆を擁し、入りて薊鎭を犯し、脅かして馬市を開かんことを以て奏せしむ。（彼等は）北部漠北に散處し、人耕織せず、地に他產なく、鍋、釜、繒絮の具、咸これを中國の給に仰ぐ。今すでに侵犯を絕つを誓ふ。故にその使卽ち互市を求む。（則ち）金、銀、牛馬、皮張、馬尾等の物を以て鹵し、緞綢、布疋、鍋、釜等の物を以て商販す。日を撰びて市を開き、その酋に令して三百人を以て邊外に駐せしめ、我は兵五百を以て市場に駐し、貿易に資す。期一月にして止む。宣府は萬全右衞張家口邊外に於いて應ず。」また明制に一年犯す無くんば市一年を許すとあるが、當時の狀況では、朝款夕寇は知り難かつた。又、軍器や米麥は交易が禁止されてゐたけれど、事實上、農業生產物は遊牧民の植物性食糧として必需品である。やはり交易は免れなかつた。また前出の大同の新平堡は隆慶四年互市を議し、後また寇塞あり、邊に備へて長城を增修し、城堡を悉く甎甃したり、更にまた萬歷二年貢市す等と記錄されて居り、當時の交易關係は、互市と掠奪との不規則的な繰返しの裡にあり、決して住民の安居樂業を保障すべき程の政治的安定があつたといふ譯ではない。從つてそれは尙兵五百の保護のもとに行はれ、指定されたる一定の場所で開かれた。かかる互市の場としての張家口の交易場は恐らく現在の上堡附近と思はれるが、彼等は現在の下堡內に居し、蒙人市に來るや卽ち堡を出て、北卽ち上堡方面に向つたものと思はれる。當時の上堡は勿論未だ築城以前のことではあり、時々夏期には河水が氾濫して防ぎやうのない砂磧の地であつたと思はれる。

下堡は上堡築城までの二百年足らずの期間といふもの張家口の全體として存在した。この間の張家口では前記のやうな互市が行はれた。張家口は旣に斯る農業地帶の中心市場でもあつた。而してこの間は絕えず互市と掠奪の不規則的な繰返しがあり、二千に近い軍兵と恐らく萬を超える住民とは常に緊張した邊疆の雰圍氣の中に生活した。

この期間のうちにあつて成化十六年には展築が行はれ、城周五里に擴大され、嘉靖八年には張珍なるものの指揮下に增修があり、また萬歷二年にも增修磚包のことが記錄されてゐる。張家口の町はづれを走る長城の修理も行はれた。張家口附近の長城は成化二十一年余子俊、嘉靖二十五年翁萬達により增修築が行はれた。これらの增修築には軍兵、屯田兵や農民等の勞働力が動員された。嘉靖年代は最も蒙漢の政治關係が惡化した年代である。

更に來遠堡築城以前の張家口卽ち今より約四、五百年以前の張家口について次の點を附記しよう。

何故に張家口堡（下堡）が現在の位置に選ばれたかといふ事は、前出汪道亭の記に明かなるごとく、現在の上堡一帶が到底夏期の出水を防ぎ難い狀況にあつたからである。この事實は現在でも考へられるところであり下堡の位置が比較的高地になつてゐる。それは例へば井戶の深さに於いて見ることも可能である。張家口市中には賣水をなす井のみにて一百三十餘眼あり、深度は下堡井約十丈、橋東井約七丈、上堡井の淺きは僅かに一丈、深きも三丈とあつて、市街の發展の形といふものが最も水の危險の少ない上堡中心に出來てきた理由が明かとなる。

（筆者は華北交通張家口鐵路局員）

可園雜記

加藤新吉

何時も阿媽とばかり呼んで、姓氏も年齡も知らずに二年も使つたが、此頃屆を出すことになつて于氏、四十五歲であることが判つた。夫は兵隊、車轔轔馬蕭々、出征した儘年を經ても還つて來ない。その存その歿、家聞知するなし、人或は言ふあるもはた信ぜんかはた疑はんか、の境涯である。口には出さないが、心目に悁々たり、寤寐に之を見ることもあるであらう。謂はば現代の孟姜女、戰爭の憐れむべき犧牲者の一人である。

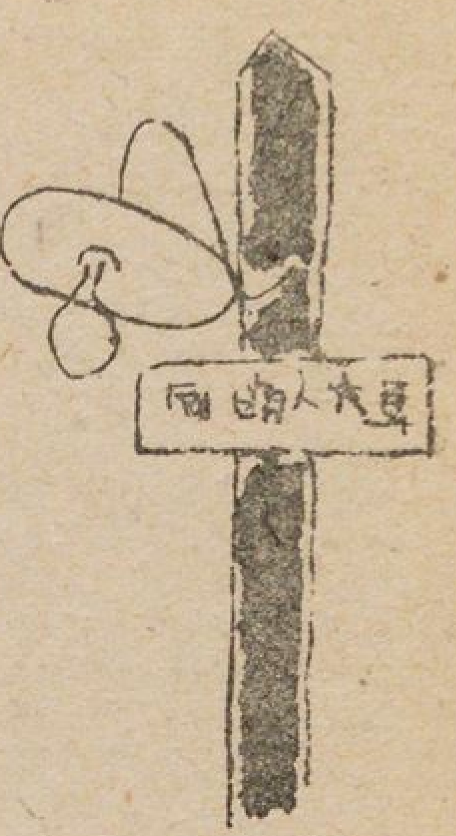
鄕里は北京の北四十支里の順義縣。去年一週間歸つてきたが、夫の消息は判らなかつたらしい。その時、歩いて行くかと聞いたら、駱駝に乘つて行くと答へたといふので、家人、大いに魂消たのであるが、それは驢馬の間違であつた。ところで、話は別だが、曾て家人、老人は來たかといふ、阿媽は駱駝は來てゐないといふ、家人は來てる筈だといふ、阿媽は決して來てないといふ珍妙な押問答をしてゐた。支那語では老頭兒と駱駝兒、兩者の發音が頗る似てゐるのである。

この阿媽、全く日本語を解しない。猶時にアツイ、サムイの二語を使ふ。彼女の知つてゐる日本語はそれだけである。日本人が支那語を習ふより、支那人に日本語を習はせよといふ人もある。私は家ではその逆を行つて、使用人に日本語を習はせようとしない。最初は双方とも困つた。厨子は、讀むだけはできるので、文字を介して意を通ずることもできたが、阿媽に至つては全くの文盲である。家人は滿洲から持參のわづかな語彙と手まねとで大いにトンチンカンを演じてゐた。ところが、一緒に居るといふこと、女同士であるといふことは恐ろしいもので、この頃ではかなり言葉も通じあひ、また言葉以上に心も通じあふらしく、双方大した不自由もなくやつてゐる。

支那人は不潔だとはよく言はれるところであるが、この阿媽は完全にそれを裏切つて居る。決して着物や寢具が汚れてゐたためしがない。いつもさつぱりしたものを着て居り、寢具はよく陽に乾して居る。からだは毎日ゆあみをして淨めて居る。部屋も寢臺もきちんと片附けて居る。注意してさうさせる譯ではないが、清潔と整頓の點に於いては殆ど非のうちどころがない。これは智識や訓練から來るのではなくて性分であるのかも知れない。ただ支那の女、特に纒足をした女の常として脚を濡らすことを嫌ふので、たとへば風呂の中の掃除など、まだるいことがあつたり、時に手の屆かないことがあつたりする憾みがある。

洗濯は正にその特技である。すきでもあるらしい。それに家人がアイロンの使ひ方を敎へたので、すくなくとも北京の日本人の洗濯屋よりは上手に仕上げる。寢衣でもカラーでもワイシヤツでも、私が毎日ぬぎすてるものを週二回の洗濯日に洗つて仕上げて、にこにこしながら運んで來る。それでゐて針は駄目なのである。自分の着物も出來たのを買つてくる。今頃だと、暮春には春服すでに成りといふ譯で、新衣を春風に吹かせて居る。暑くなるとちやんと麻を着る。その代り二三枚より多くは持つてゐない。傷むと賣る。自由學園のお婆さんに褒められる資格があると家人は言ふのである。

（筆者は華北交通會社參與）



北支暢談

萬里長城

北京がどんな町か知らない日本人でも、長城の名には馴染が深く、子供の時分から、大抵、ああだらう、かうだらうと想像してゐるものだ。

長城は甘粛省安西州の東より起つて高嶽靈峰の絶頂を傳ひつつ、河北省の北境、山海關の波打際に及んでゐる。長さ五千四百四十支里、之に若し複壘の延長を加算すれば一萬二千餘支里に達し「萬里長城」の名は誇大なものでなく、却つて二千餘支里だけ遠慮されてゐる。これを日本里に換算しても二千里餘に達する。

秦の始皇帝によつて築かれたと通常言觸らされてゐるが、實はその前の戰國時代に、大體の形は整つてゐた。それが始皇帝の統一直前たる六國末には甘粛省東南から、陝西省北部にかけて秦の長城、陝西省北部から黄河へかけて魏の長城、また山西省北部には趙の長城、河北省から遼東へかけて燕の長城と大體において斷續はされてゐたが一線を劃してゐた。始皇帝は天下を統一してから僅か十二年目に死んだのであるがこの短い間にこの途切れてゐた長城を繋ぎ合せたのである。萬里の長城の築造を千古の愚擧だとけなす人もあるが、當時の漢民族はこの築造に眞劍であつた。夷狄の防禦こそ漢民族最大の目的であつたからである。元の侵略、清の侵略など中原を征服し得たものはみなこの長城を突破してゐることを見ても頷けよう。

長城は山嶽要害の地でも、特に嶮岨な地勢を選び、自然の巨石、巨巖を基礎としてゐる。山岳地帶のものは大抵その高さ十五尺乃至三十尺、壁上の幅は二十尺内外で硬質の煉瓦で覆被されてゐるのが普通である。壁の上には數十尺毎に烽火臺があり、長城守備の軍卒は此處に駐屯してゐた。烽火臺の内部の床に地下道が穿たれ、中原の方へ出口となつてゐる。谷を渉り山を越えて蜿蜒と續くこの長城に關しては又幾多の悲しき物語が祕められてゐる。中でも戀しき夫を長城の苦役に徴發された孟姜女の哀怨切々たる傳説は俗謠に小説に、芝居に、多くの人々に膾炙されてゐる。



佛教の傳來

後漢の明帝が、或日うとうとと晝寢をしてゐると、夢の中に黄金作りの人間が現はれ、それが佛であるとの靈感をさづけて、西方へ消え去つてしまつた。そこで明帝は、蔡愔といふ者を西域の大月氏の國にやつて佛教を求めさせたところ、蔡愔は二年の後やつと使命を果し大月氏の國から二人の僧と佛像と經典を白馬にのせて歸つてきた。そこで明帝は大いに喜び都の洛陽に寺院を建立し、白馬が佛像、佛典を支那まで運んで來たことに因んでこの寺を白馬寺と名づけた。そして連れて來た二人の僧に經典を漢譯させ、佛教を弘めさせた。これが支那に佛教の傳はつた初めであると云はれる。蔡愔が大月氏の國から歸つて來たのは皇紀七二七年今から千八百七十五年前である。

支那料理の歴史

山海珍味を以て世界一とする支那料理——あらゆる材料が使用され、しかもそれぞれの特徴を生かして作られた豐富な料理——然しこの様に美食を誇る支那人も、かつては木の實、草の實を採り、鳥獸の生肉をくらつてゐたのである。火の利用法を知つたのは燧人氏に至つてからで、それより初めて肉を炙るやうになつた。更に伏犧氏にいたつて牧畜を試み、神農氏にいたつて農業が起り、やうやく五穀家畜の類を常備するまで進んできたが、當時は未だ穀類を石の上で燒いて用ゐたと云はれる。

黄帝は米を炊いて飯にすることを發案し、夏の禹の頃、儀狄と云ふ人が米を釀して酒にすることを發明した。

周代（西暦前一三二七——一二五五）

には穀類を常食とし、蔬菜、肉食も當然行はれ、魚、鳥、牛、豚、羊を五鼎の食とし、鹿、馬、熊、狼の類までも調理して用ゐた。又、夏の儀狄が發明した濁酒が、杜康と云ふ人によつて清酒に改良された。

漢代（西暦前二〇六――後二一九）には餅、饅頭、麵などが案出され、調味料として鹽、酢、蜜、胡麻等が用ゐられた。

唐代（西暦六一八――九〇五）にはめざましい進歩發達を遂げ、今日の支那料理の素地はこの時代に作られたのである。

北京の城門と城壁

夏になると砂土の積つた城内の屋根や城壁の磚の間にはペンペン草や名無草が萌える。曾ては四百餘州に君臨した帝王の都城である。近くから見ても遠くから眺めても風雨の別なく旅人の心に情緒を添へる。もともと支那の城壁は街全體を護る仕組になつてゐて日本の城のやうに孤立した感じを與へない、特に北京の城門と城壁は紫禁城と共にすべて均衡を重んじて設計されたもので城門各個に見ても美術的よさを持つてゐるのである。この封建時代の遺物が幾度かの兵變に北京を護つたわけで、最近は又そこら鼠賊共を防いでゐる。近頃は城門の下に斷髪に黒い制帽、黒ラシヤの制服に金ボタンも凛々しい姑娘巡査が現れて、往き來する女たちの檢査を行つてゐる。

今の北京の地に始めて都城が營まれたのは遼の太宗の會同元年で、當時從來の幽州鎭城を擴大築城して燕京と稱し、南京に列したのである。之は丁度我國の平安朝の初期で　朱雀天皇の承平七年(皇紀一五九七年)に當る。當時の城壁は周圍三十六里の土城でその高さは三丈に及んだと云はれるが、遼に代つた金も亦此處に都して中都大興府と稱し、海陵王の時には一時周圍七十五里に及ぶ大擴張を行つたこともあつた。當時此の遼、金の都城であつた燕京、中都の城址は、現在、外城右安門西方の鳳凰嘴と云ふ小部落を中心として、其の西南の一角を存してゐる。

金の後に天下を取つた元が北京に入ると世祖の至元四年に舊城の東北に地を相して周圍六十里の新都城を造營した。これが即ちマルコポーロの旅行記に見えるカンバリツク（汗の都）で元の大都である。

然るに此の元の築城後丁度百年目に當る洪武元年に大都は明の將軍徐達に占領せられ、元帝は城を捨てて朔北に奔つたのであるが、徐達は其の都城の餘りに廣大なるを見て北の方の三分の一を削除した上、煉瓦を以て其の外面を包み城門の月城に外門を建てて堅固な城郭に作り上げた。

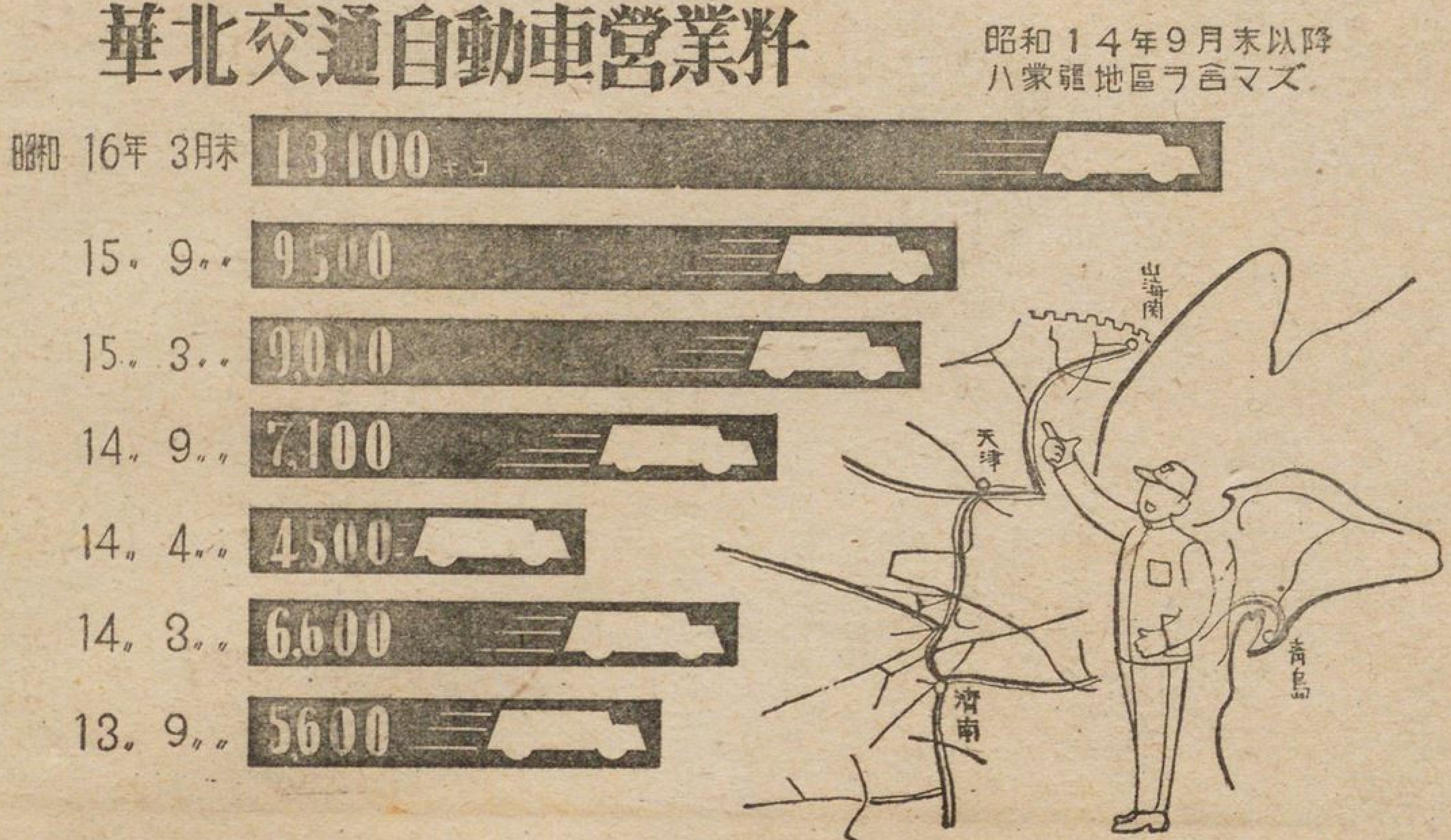
明は其の後一時南京に奠都して此所を北平としたが、永樂元年に成祖が靖難の師を收めて即位すると、其の舊封地であつた北平を改めて北京とし、永樂四年七月には詔して北京に宮殿を建て城垣を修めて遷都の準備に着手し、十九年正月漸く完成するや、北京を京師として遷都を決行した。ここに於いて、内城は漸く現在の形を整へたのであるが、この完成は、我が應永二十八年（皇紀二〇八一年）で、太田道灌の江戸城築造に先立つこと、三十六年であつた。

これに引續き正統四年（皇紀二〇九九年）に内城各門の正樓と月城の門樓とが整ひ、四隅に角樓が立てられ、其の城濠が深められ、各門外の木橋は悉く石橋に換へられ、門外には立派な牌樓も立てられた。その後、嘉靖三十二年（皇紀二二一三年）に始めて今の外城が築造されたのである。

清代には屢〻改修が行はれたが、現在の城門に立つ門樓や箭樓は大部分、乾隆朝の重修を經たものである。

自動車

北支・蒙疆の統計11



北支・蒙疆のやうに鐵道網の密度の極めて低いところでは、鐵道の補助或は代行機關として自動車の役割は特に大きい。北支に於いて自動車網の發達を示したのは、民國十五年から行はれた「國家統一の要諦は交通を發達せしめ、治安の維持、産業の開發を圖るにあり」とする、南支の道路建設に刺戟されたものである。

一九三五年（民國二十四年）迄に建設された自動車の運行可能な道路は二三、五九八キロ、その中實際に自動車の運行されてゐた道路は一三、七八一キロ、車輛數は五、二一二輛であつた。

然るに事變以來これら北支の路線に運轉されてゐた自動車は支那軍に徴發或ひは燒却せられ、道路も破壞されたもの多く、支那側の自動車運行は全く不可能に陷つたのである。

昭和十年六月より冀東地區内に於いて自動車運營を行つてゐた滿鐵は軍の進攻につれて運行範圍を擴大し、滿鐵の資本と人とによつて華北汽車公司と蒙疆汽車公司の兩會社を創設、鋭意路線の復舊と伸長に努力した。昭和十四年四月華北交通會社の創立によつて華北汽車公司の事業は之に包含され、蒙疆政府はその特殊事情によつて、別に蒙疆汽車公司を創設した。

以來北支の自動車事業は全く華北交通の經營下に移り、自動車路線の伸長振はまことに目覺しきものがあつた。昭和十六年三月末には一萬三千キロ、その主要路線一九〇餘線に達し、殆ど戰前に近迫せる路線の開設をなしたのである。

又華北交通は滿洲における滿鐵と同じく鐵道、水運と共に自動車をも綜合的に一貫經營して、各〻の機能を、有機的に發揮せしめようとするものである。現在その輸送は人よりも物を主として旅客四、貨物六の割合であつて、華北交通の自動車が如何に地方物資の集散に寄與しつつあるかがわかる。

昭和十六年五月十五日印刷納本
昭和十六年六月一日發行

六月號
（毎月一回一日發行）

編輯者 北京・華北交通株式會社 資業局 加藤新吉
發行者 東京市麴町區三番町一 長谷川巳之吉
印刷者 小石川區久堅町一〇八 共同印刷株式會社 大橋松雄
發行所 東京市麴町區三番町一 第一書房
振替東京 六四二二三番
電話九段（33）三一四一番 三三四五番

一冊定價（停）三十錢（郵送料一錢五厘）
一ヶ年分 金三圓六十錢

廣告取扱
大阪市西區京町堀上通一丁目二五
一手取扱所 一新社
電話土佐堀九三九

寄生性、瘙痒性 皮膚病に



ムナバールは化學的に合成したる有機硫黄化合體ヂメチル・ヂフエニーレン・ヂスルフイドにして皮内に滲透して强力なる殺虫作用を發揮し、同時に優秀なる止痒消炎作用を呈する理想的皮膚病藥なり。

【特　徵】

一、用法簡便且つ無害・無刺戟にして何等副作用を伴はず。

一、嫌惡すべき臭氣なく且つ衣服類を汚損することなし。

一、品質純良にして約二六%の硫黄を含有す。

適　應

疥癬・頑癬・濕疹一切白癬・水蟲・面皰・汗疱・陰囊頑癬・皮膚化膿疹・傳染性膿疱疹・皮膚瘙痒症其他寄生性及瘙痒性及皮膚諸疾患

包　裝

一〇瓦（瓶入）
二五瓦（〃）
一〇〇瓦（〃）
五〇〇瓦（罐入）
一〇〇〇瓦（〃）

製造發賣元　日本染料製造株式會社　大阪市此花區春日出町

一手販賣元　株式會社　稻畑商店　大阪市南區順慶町二丁目

日染

ムナバール